

影の君主とDゲーム

寝心地

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

輪廻の杯を使い時間を巻き戻し君主達との死闘を終え約30年の地獄を生き抜いた2代目影の君主、しかし地球への帰還時不具合を起こしたゲートにより己のいた世界に良く似た異世界に飛ばされてしまう、そこで彼は命を賭けたゲームに巻き込まれていく

目次

死闘の終わりと異変	2
人形アートと支配者との再会	10
死のゲームと初バトルそして新たな出会	
い	19
イベント開始と再会	32
力の片鱗と花	42
女王と水使いとの出会い	56
最低最悪の愚王	77
王の鉄槌	89
イベント勝者	98
模擬戦とお出掛け	108
夕暮れ時の烏達	116

誘拐と予知夢	127
克蘭バトル	134
盲目の種との出会い	145
盲目の種の選択	155
発芽の時	166
第2回イベント告知そしてスタート!?	174
狩られる狩人、狩る獲物	183
ベルVSドウメそして潜入	194
謎の保険屋カネヒラ	205
影の兵士の実力	216
烏達の傍観	221
狩りの対象	228

舞姫降臨	333
完成種	324
精算と不穏な事件	313
水篠旬	303
影の秘密	295
異界難民	283
影達の密会	274
50000点の獲物	266
イベントクリアの条件	260
西郷組	249
巫女	241
カネヒラの実力	234

死闘の終わりと異変

何も無い空間、ただただ地面の続く乾いた大地、そこに無数に積み上げられた異形の死骸、その中でも特に高く積まれた山の天辺に彼は立っていた、闇を凝縮した用な全身鎧に1対の漆黒の短剣、腰程までに伸びた髪を靡かせながら彼は空を見上げながら一人言のように話始めた

??? 「……………ようやく終わった」

????? 「王よ、今回の戦いの勝利誠におめでとうございます」

??? 「……………ああ、これで安心して皆の所に帰れる」

?? 「キエエ、王よ、全ての兵の準備が完了いたしました」

??? 「ご苦労様、それじゃあ帰るか30年振り、向こうからしたらまだ2年だけど、久々

の我が家に」

???? 「恐れながら王よ、30年経とうと2年経とうと、王が家族と共にしていたはずの時間が奪われた事に変わりはありません、それはとても辛い事なのだと思います」

??? 「……ああ、そうだな、お前の言う通りだ……さあ帰ろう」

常人が見れば明らかに訳ありと言わんばかりの男の近くには2人の騎士と1匹の蟻がいた、騎士の片方は所謂中世の甲冑の用な鎧とマントを纏い兜に羽を着けていた、もう片方も似たようなもので違いと言えば背中に折れた翼が付いていること兜が全面を覆うものではないことマントを付けていないことそして前者の騎士より体格が良いことと位だろう、そして蟻に關してもただ蟻としか表現しようが無い、二足歩行で人間並みの大きさと喋る事を除けばだが、しかし彼ら全員が全身を黒く染め上げている、嫌むしろ黒い何かが騎士と蟻の形をしていると言った方が正しいのかもしれない

そんな中王と呼ばれた男は右手の短剣を手放し前に掲げた、すると途端に空間が揺れ大きな穴が空間に空いた穴の向こうは見えないが大きさは大人一人余裕で通れる大き

さがある

??? 「皆、今帰るよ」

その言葉を合図にするかの用に今まで王のそばにいた三人は姿を消し彼らがいた場所には黒い煙のような物が一瞬揺らぎ一瞬王の影が揺れた途端に煙も消えた、それを確認した後王は一人静かに笑い空に空いた穴に向かって飛んだ、本来の彼ならこの段階で気づけていたかもしれない空の穴、ゲートに淀みが出来ている事を、そしてそれに気づけばこのような不用意な行為をする事も無かっただろう、彼の姿が消えた後ゲートもその姿を消しその場には無数に積み上げられた異形、モンスターの死骸と言う破壊の痕跡のみが残された、

??? 「……………これは、どういう事だ？」

王は困惑と僅かな驚きを抱いていた彼は間違はなくゲートを通った、ならば出口となるもう一つのゲート口を通るはずだ、しかし実際にはゲートを通った途端道端に立っていた、実際に、トンネルに入り出口も無いのに入った場所以外から出ることは不可能だ、

しかし今王は実際それを経験しそして困惑している自然と王は警戒心を高め違和感と疑問を持ちながらもかつて自分が住んでいた家を目指した、しかし

??? 「……どうなってる？」

王の目に飛び込んできた光景、それは自分が住んでいた家は無くあるのは大きなキャンプ場、確かに今までおかしな事はあった、いくら30年使わなかった道とは言え家までの道を忘れるとは考えにくい、にも拘らず見たこと無い店や看板、道の作りすら若干違っていたが王は30年使わなかった弊害だろうと大して気にしていなかった

??? 「ベル」

ベルと呼ばれ即座に顔を出したのは先程いた三人のうちの一人、と言うか1匹の蟻だ
ベル「ハッ、お呼びでしょうか王よ」

??? 「何人か連れて俺の家らしき物を探してくれ道を間違えた可能性もある、俺はここ

の管理人に聞いてみる、くれぐれも人間に見つかるなよ？」

ベル「御意、すぐに搜索いたします」

ベルの言葉と共に20程の影が王の影から離脱しバラバラの方向に飛んでいった

??? 「すみません」

管理人「はい、どうしました？」

??? 「いえ、少しお聞きしたいことが、ここ前はアパートか何かじゃありませんでした
?」

管理人「え?、いえ私も10年程ここで管理人してますが聞いたこと無いですね」

??? 「え?」

それは王に絶望を叩きつけるには十分過ぎる言葉だった王のいたあの空間は地球の何倍ものスピードで時が進む、王はそんな空間に30年いた、しかし地球では2年程しか立っておらず王の家族から見れば2年ぶりの再会になるはずだった、しかしそんな家が立っていたはずの場所は10年前から変わっていないと言われたつまり彼の家は存在しないと言われているのと同義であった

??? 「どうなってる」

????? 「王よ、まだベル達が搜索から戻っていません、道を間違えた可能性もあるかと」

??? 「……ああ、そうだなベリオン、お前の言う通りだ」

ベリオンと呼ばれた翼の折れた騎士は王を励ますように話しかけた、そしてそのおかげで王は冷静さを取り戻した

??? 「しかし、ベル達の方もダメだった時のことも考えなきやな……イグリット」

名前を呼ばれ返事をしたのは羽付き兜のマンントの騎士だ

イグリット「ハッ、王よご命令を」

???「何か情報を持ってきてくれ、なんでも良い何か俺がいた時と明らかに違う情報を持ってきてくれ」

イグリット「ハッ、かしこまりました」

するとイグリットは王の影から離脱しそれから入れ替わるようにベル達が戻ってきた

???「どうだった？」

ベル「キエエ、王よ、申し訳ありません、半径数キロに渡って探しましたがやはり王がかつてご家族と住まわっていた家らしきものは見つかりませんでした」

???「……そうか、と言うことはどうやらここは俺のいた地球と違う可能性があるな、とにかくまずはイグリットの帰りを待とう」

そしてそれから一時間程立った時イグリットは戻ってきた

???「どうだった？」

イグリット「はい、私が覚えている限りの情報と照らし合わせた結果まずこの国のトップの名前が変わっていました」

???「そうか、じゃあやっぱりここは俺のいた地球と違うのか？他には何か？」

イグリット「はい、これは違いと言うより以前は無かったことなのですが」

イグリット「謎の人形アートが作られているようです」

人形アートと支配者との再会

??? 「人形アート？」

イグリット「はい、何でも前日まで何も無かった壁や地面にいつの間にか現れているそうです、絵が描いてある訳では無く壁をくりぬいて作られているようでした」

??? 「壁をくりぬいて？削ってる訳じゃなくて？」

イグリット「はい、私も確認して来ましたがあれは削るといふよりくりぬいて作られているようでした、更に詳しく調べた結果あれは芸術品等ではありません」

??? 「芸術じゃない？、じゃあ何だ？」

イグリット「はい、恐らくですがあれは人の死を隠蔽した跡だと思われ、あそこからは死の気配を感じました」

??? 「……そうか、気になるな、イグリットその場所まで案内してくれ本人に直接聞いてみよう」

イグリット「畏まりました」

イグリットが王の影に戻るのを確認すると王は歩き出した、イグリットが案内している様子は無いが王の足取りに迷いは無く導かれる用に足を進めた、それから15分程で王は足を止めイグリットに話しかけた

??? 「……これか」

イグリット「そうです」

??? 「……確かに死の気配があるな」

王は人形アートの側で片膝を付き人形アートに意識を集中させ一言命令を発する

??? 「……起きろ」

それは普段誰もが使うありふれた言葉、しかし誰もが使うそのありふれた言葉は王が発した時特別な力を持つ言葉に昇華する

王の命令に答える用に人形アートから黒い煙が立ち上るそれは次第に大きくなりやがて人形に形成され王に頭を垂れた

??? 「お前を殺したのは誰だ？」

影の人形 「………」

??? 「そうか、何故殺された？」

影の人形 「………」

??? 「……何故そんなことを？」

影の人形「……………」

??? 「…ゲーム？、人が死ぬ事がか？」

影の人形「……………」

??? 「そうか分かった、安らかに眠れ」

王は影との対話を終えた、影は喋ることは無かったが王には影の言葉がはつきり聞こえていたむしろ影の人形が喋ることはほとんど無い、しかし王は相手の心を読み言いたい事がわかる、彼の支配出来る死んだ後の人間に限るがそれでも破格の力だろう、王は聞きたい事を聞き終え彼を支配から解放した、すると途端に今までそこにいた影の人形は形を崩しまるで何もいなくなったように姿を消した

ベル「王よ、これから如何致しましょう？」

??? 「…そうだな、何をするにしてもまず住む所を探さないと、ホテルか最悪ネカフエに行きたいが、異世界となると通過が違う可能性もあるし同じでも紙幣も硬貨も違うだろうから使えないか、そもそも今そんなに持ってないし」

王が考え込んでいると後ろに知っている気配を感じた、恐らく今の状況に誰よりも詳しく王が今最も会いたい相手の気配、王は躊躇い無く後ろを振り返りその姿を捉えた

??? 「……この状況について詳しく教えて欲しいんだけど？」

????? 「畏まりました、君主様、ですが先ずは君主達との戦いお疲れ様でした」

??? 「それはもういい、今の俺の状況について教えてくれ」

????? 「はい、まずここは君主様がもといた世界とは違った道を進んだ世界、所謂パラレルワールドです」

??? 「異世界じゃなくてパラレルワールドだったのか、それで？何でこんなことになった？」

????? 「はい、それはゲートの不具合によりゲートに穴が空き君主様がその穴に落ちた事が原因だと思われまます」

??? 「ゲートに穴？そんなこと聞いたこと無いぞ」

????? 「ええ、普段あまり起きないことですから、ただ大きな力同士がぶつかった時良く起きるのです」

??? 「ああなるほど、それで？俺はどうやってたら帰れる？、ゲートが不安定なら出来るだけ使いたく無いんだけど？」

????? 「それが、誠に申し訳ありませんが恐らく今のままでは君主様の帰還は非常に難しいです」

??? 「……何？」

????? 「王の力は以前と比べ物にならない程強く大きくなりました、」

??? 「なるほど分かった、つまり世界が俺を受け止めきれないと？」

????? 「おっしゃる通りでございます」

その返答を聞いて王は少し落ち込んだ、つまりこの人物は王が帰還すればその影響で世界が減ぶと言っているのだ、プロピッチャーの球を小学生キャッチャーが受け止める事はほぼ不可能仮に出来てもどんな影響があるか分からない、しかも飛んでくる球がバレーボールやサッカーボール並みのサイズだったら、確実に受け止める事は出来ず壊れてしまう

????? 「しかし希望が無いわけでもありません」

??? 「何?、他に方法があるのか？」

???? 「はい、それは、おっともう時間か」

すると途端に王と話していた相手の体が光だし次第に消え始めた

???? 「申し訳ありません、君主様、我々を持ってしてもこちらに居られる時間は限られますのでこの辺で失礼します、代わりと言ってはなんです。が此方をお使いください、元の世界に戻る手がかりとこの世界の紙幣です」

??? 「ありがとう、使わせて貰う」

???? 「無事帰還される事を支配者一同願っております」

するとその人物は光を発し消えていった。それを見届けた後、王は手がかりだと渡された端末を操作していた

??? 「スマホか、でもアプリ殆ど入ってないな、ん？」

そこには地図や検索アプリと言った一般的なアプリが入っていた、しかしその中に手がかりと言われ渡された端末に場違いなアプリが1つ他のアプリと話されて入れられていたこれが最も重要な手がかりだと気づいた王は顔をしかめながらアプリの名を呼んだ

???
「ダーウィンスゲーム？」

死のゲームと初バトルそして新たな出会い

??? 「ダーウィنزゲーム？」

ベリオン 「王よ、お気をつけ下さい、そこから不快な力の流れを感じます」

??? 「ああ、でも支配者がよこした手がかりでもある、娯楽のために入れてあるとは思えない」

ベリオン 「それには私も同意見です」

ベリオンが警戒する謎のアプリ、王は一瞬考え他に手がかりが無い為結局起動することにした、アプリを起動すると普通のゲームと同じロード画面に主張が激しい蛇の絵が描かれていた

??? 「見た目は普通のゲームと同じだな」

ベル「王よ!!!」

??? 「ああ」

ベルの叫びと共に画面から蛇が飛び出し王に噛みつこうと迫ってきた、しかしその蛇が噛みつく事は叶わずまるで何かに切り裂かれた用に胴と頭が別れ霞の用に消えた、実際王は何もしていない、かといって兵達が何かしたわけでもない、ただ波に飲まれる魚の用に大きすぎる王の力に蛇の小さな力が流されたただけだったそんなことを知らず王は愚かな蛇の頭が落ちていた場所をじつと見つめる

??? 「何だったんだ？」

イグリット「分かりません、突然体が割けた用に見えました」

??? 「まあいいや、とにかく何か、ん？」

王は再びスマホに目をやるそこにはいたって普通のゲームと同じホーム画面が映し出されていた

??? 「普通のゲームと変わらないな、いや、そういう風に擬態して裏では殺し合いゲームをやらせてるってことか？」

王は普通のゲームと変わらないゲーム画面に驚きつつゲームの秘密を探ろうといじくっていた

??? 「やっぱりこのバトルって項目は怪しいよな、さわった瞬間殺し合いスタートって所か？」

ベル 「王よ、戦ですか!?!、ならば拙者すぐに出陣を!!」

??? 「ベル、落ち着け何も分からない状態でいきなり戦いなんてするわけ無いだろう、今はあの時と違って地球の運命がかかっているわけでも無いんだから」

ベル「ハッ、畏まりました、しかし戦の際は拙者の力を存分に振るいましょう」

??? 「それは期待してるよ、ん？」

そう、王は別に好戦的な性格ではない、自分の大切なものに危険が起きない限り穏やかな性格だ、しかし王は一つ勘違いしている、このゲームが殺人ゲームと分かっていながら大事な事を忘れていた、危害は向こうからやってくる

(マッチング開始……3、2、1、バトルスタート)

??? 「ッ!!」

すると画面が変わり王に似た姿のアバターと反対側に梟の仮面を被ったアバターがファイティングポーズを取った姿が映し出されて直後目の前に相手のアバターと良く似た梟の仮面を被った男がどこからか現れた

??? 「何者だ、どうやって現れた」

梟仮面「ああ？、何だ初心者かラツキー、さっさと殺して終わらせよう、まあ初戦の相手が俺だったことを後悔しながら死ね」

??? 「もう一度だけ聞く、誰だ、そしてどうやって現れた、3回目は無いぞ」

梟仮面「ひやははは!!、答えるわけねえくだろバーカ!!」

??? 「そうか、ならば苦しみながら死ね」

その瞬間梟仮面の右腕が宙を舞った

梟仮面「ひやははは、あ？、い、いつでえええええ!!!」

??? 「何を呆けている？、次は左足だ」

その瞬間梟仮面の左足が飛んだ

??? 「次は右足」

そして梟仮面の右足が飛んだ

梟仮面 「ま、待て!!!、いやまってください、降参です、ごうざんじまですがら」

その時スマホから機械的な声が聞こえた

(You win!!)

??? 「これで終わりか?、じゃあ色々話を聞かせて貰おうか?」

梟仮面 「あんた何もんだ?、おかしいだろシギル使つてずっと見てたのに見えないと

か」

??? 「シギル？何だそれ」

梟仮面「そんなことも知らないのか？、なんであんな強いくせになんも知らねえんだよ、シギルつてのはプレイヤーに与えられる力の事だよ、口から炎出したり、見えない壁作れたり色々あるそれこそプレイヤーの数だけ有るんじゃないか？」

??? 「なるほど、次だ、どうやってあそこに現れた？」

梟仮面「あんたをバトルの相手に指名したからだよ、ほらここに大体のプレイヤーの名前が乗ってて好きなやつと好きな時にバトル出来る、他にも目の前の相手にバトルを挑む方法もある」

??? 「なるほど、大体聞きたい事は聞いた、じゃあな」

梟仮面「あんた本当に何者なんだ？」

??? 「俺は匂、水篠 匂 じゃあな」

それだけ言うと王、匂はさっさとその場を立ち去った

それから匂は支配者から貰った金を使い格安ネットカフェで何日か過ごしながらダーウィنزゲームの手がかりを探すため再びスマホをいじくっていた因みに何人か兵士を使い探索もさせている

匂「やつば見れば見るほど普通のゲームだな、バトル、メニュー、ガチャ、ストア、折角だしガチャやってみるか」

ガチャのボタンを押し画面が切り替わる、ホーム画面にいた蛇が現れたと思えばその腹は大きくなり蛇は苦しみながら1つのカプセルを吐いた

(ノーマル)

そこには何かナイフの用な絵と共にノーマルの文字すると直後後ろに何か落ちてきた音がした、そこには先程の絵と似た1降りのナイフが落ちていた

旬「なるほど、ふざけたゲームだ」

???「すみません少しいですか？」

すると突然声をかけられ少し慌てたが顔に出さずゆっくり声の主に向けたそこにいたのは小柄の少女黒髪を短く切り揃えた女の子がうまい棒片手に立っていた、年齢的に10歳から11歳ほどに見える

旬「何かご用意かな、お嬢さん」

???「む、お嬢さんと呼ばれるのは御免です、私の事はレインか解析屋でお願いします」

旬「解析屋？まあいいやそれでレインさん、何か用かな？」

レイン「単刀直入で聞きますが、あなたダーウィنزゲーム、Dゲームプレイヤーで
すね？」

旬「ッ！、なぜそれを？」

レイン「あなたの後ろに突然そのナイフが現れましたそして貴方はそれを手に取りま
るで自分の物のような顔をして笑っていた、それだけです」

旬「なるほどそれで？それを見てどうする？俺を殺すか？」

レイン「そんなことしませんよ、現に武器を持ってきてきてないですしね、ただ忠告をこ
のゲームの正式な名前を言わない方がいいですよ、死にますから」

旬「なるほど、ありがとう」

レイン「いえ、ただ夜の鷹（ナイトホーク）に勝った相手を見ておきたかっただけで
すし」

旬「夜の鷹（ナイトホーク）？」

レイン「あなたがぼこぼこにした梟仮面です」

旬「あいつそんな名前だったのかて言うか仮面は梟だったじゃないか」

レイン「まあ言いたいことは分かります、でもそれだけ強いプレイヤーだったって事ですよ、あなたの評価はゲームの中でかなり注目される用になりました、恐らく無敗の女王の敗北と同じくらい」

旬「無敗の女王？」

レイン「戦績49戦49勝負け知らずの女王、故に無敗の女王です、まあ負けちゃいましたけど、恐らくゲーム史上最大のジャイアントキリングです」

旬「まあそれも気になるけど、取り敢えず忠告感謝する」

レイン「はい、それではお気をつけて」

そうして影の君主水篠旬そして解析屋レインはこの場は別れるとベルは旬に話しかけた

ベル「王よ、」

旬「ああ、分かってる」

そう、旬も表面上穏やかな雰囲気装っていたが内心は気が気で無かった

旬「なぜ昨日の事を知ってるんだろうな？、あの場には誰もいなかったのに」

そう彼の初バトルの時周りには誰もいなかった、つまり知りようが無いのだ彼の強さを、例の梟仮面が話していたのか独自の情報網によるものかそれは影の君主を持ってしても分からないだろう、少なくともこの時は

旬「それより今はこっちだよな」

(イベント告知!! 東京渋谷似て宝探しイベントを行います、ポイント大量ゲットのチャンス!!)

旬「本当にふざけたゲームだよ」

イベント開始と再会

旬「いよいよか」

ベル「王よ、渋谷に向かわなくて宜しいのですか？」

レインと別れてから数日、今日は告知のあったイベント開始日、普通ならば渋谷に向かうべきはずの旬はいつも通りネカフエの椅子に座り、告知画面を眺めていた

旬「ああ、このゲームは恐らくイベントを強制してくる、なら何処にいても結局渋谷に飛ばされる梟仮面みたいにな」

ベル「なるほど、出過ぎた発現お許し下さい」

旬「いや、お前の心配も良く分かる、まあ呼ばれなくても渋谷に兵士を一体置いてる最悪こつちが飛ばばいい、本当は行きたくないが逆らったらどうなるか分かんないし

な」

するとイベント告知時間になった瞬間匂の周りに青い線の箱が現れる影の君主の力を持つてすれば振りほどけないこともないが渋谷に行かなくては話しにならないのでそれはやめておく、ベルもすぐさま匂の影の中に潜り戦に備え匂は静かに目を閉じる

次に目を開けた時匂は何処かのホテルの一室にいた、周りを確かめっているとスマホが鳴りイベントの説明が描かれていた

(シブヤの町に隠された宝を見つけ、一気に大量ポイントゲットしよう!!制限時間は24時間!!、参加プレイヤーは300人、全員バトルロワイヤルモードに設定されるからもちろん攻撃OK!!ゲームに出現するリングはトパーズ、ベリドット、ラピスラズリ、ルビー、サファイア、エメラルド、ダイヤモンドの七種類!!リングはゲーム終了後、それぞれ以下のポイントと交換されます!!)

トパーズ100ポイント

ベリドット1500ポイント

ラピスラズリ3000ポイント

ルビー500ポイント

サファイア800ポイント

エメラルド1200ポイント

ダイヤモンド2000ポイント

(もしゲームがクリアされずに制限時間を過ぎた場合、リングの所有数が3個未満のプレイヤーはゲームオーバーです)

旬「本当にふざけたゲームだ」

旬は説明を読み終わると同時に察した、人殺しを強要するゲームが攻撃を認めるのは別におかしなことはない、では何が問題なのか、それはお宝が明確にされていないことだ、まるでリングがお宝であるかのように書いてあるがリングがお宝であるとは一言も書かれていない、にも関わらずリングを探せと書いてある、つまりこのゲームは最初からクリアを前提に考えられていない、ゲームであるならクリアはあるのだろう、しかしこのゲームはそれらのヒントを全て隠した状態で行われるではどうなるか、皆リングがお宝であると思いい込み結果取り合い殺し合いへと発展する、その場は完全に地獄になるだろう、一先ずリングを探さないと何も始まらないと思った旬は何処かにリングが無いか辺りを探し始めた、すると再びスマホが鳴りだした

(リングを探す時はカメラを切り替えて探してね!!カメラの光っている所がリングが隠してある場所だよ)

旬はカメラを使い辺りを見渡すするとちょうど隣の部屋に1つ置いてあるのを確認し部屋を出る扉を押し開けるすると

??? 「ッ!!、くそっ」

そこには白いパーカーの大きな男がいた。右腰に銃、左手にナイフを持ち、右手にカメラを持つていた。旬は一度後ろに下がり、ナイフによる攻撃を避け、再び前に出るとナイフを持つ手を蹴り上げ、そのナイフを掴むと相手の喉元に突き刺した。

旬「ふー、早いところリングと宝を見つけ無いとな」

旬は少し呼吸を整え、人海戦術に切り替える事を決める。

旬「……出てこい」

部屋いっぱいに出てきた影の兵士に命令を下す。

旬「リングを探してくれ、どの宝石の物でもいい、もしプレイヤーに見つかった場合は相手が攻撃してきた場合のみ反撃を許可する、行け」

命令を下すと同時に影に潜り、一斉に散らばり、それぞれの方向に飛んでいった。旬自ら

も部屋を出て辺りを探索するすると時々奇妙な死体を見つける事があつた全身を蔦に覆われ額を撃たれたような死体だ、そんなものを見ながらリングを探す、エレベーターがある廊下に出ると人影が3つ、1つは匂の影の兵士、二人は男女のペアでどちらも若い、男の子の方は兵士に銃を向け女の子の方は僅かに体を震わせながら必死に少年に何かを訴えかけていた、その少女には見覚えがあつた

匂「レイン？」

レイン「あなたは!!」

レイン サイド

カナメさんがマシンガンを持った男にリングを奪われ私と一時的に手を組む事を決めこれからの方針を話し合っていた時それは突如現れた、何も無い空間からいきなり現れた、そして立ち尽くしている、敵対行動を取るわけでも友好的に接してくる訳でもなくただ立ち尽くす、しかしその姿が何よりも恐ろしく見ているだけで体が震え嫌な汗が流れる、世界関数（ラプラス）を使う間でもない、敵対されれば確実に死ぬ、逃げるこ

とは不可能と分かっているとしても最後の希望を求め世界関数（ラプラス）を発動する結果は言うまでもないどんな行動を取ろうと100%死ぬそれが世界関数（ラプラス）がだした答えだった、余りの結果と恐怖で私は頭痛と吐き気を催した

レイン「う、うええええええええ、い、嫌だ、そんな死に方!!」

カナメさんが私にかけより背中を擦ってくれる、けどそんな事に気づけない位私は混乱と恐怖に飲み込まれていた、カナメさんがその謎の存在に銃を向け警告する

カナメ「おい!!、何者か知らねえけどこれ以上近づくな!!」

私は更なる恐怖に飲み込まれる感覚に陥りカナメさんを止めるよう行動する

レイン「カナメさん!! 止めてください!! そんなことしたら死んでしまいます!! 止めてください!!!」

未だに100%の死を告げる世界関数（ラプラス）最早今生きている事が奇跡と思え

るほどの状態、そして私は更なる奇跡を求める事しか出来無かった、そしてその奇跡は訪れた見覚えのある人影が謎の存在の後ろから現れると同時に世界関数（ラプラス）の告げる100%の死が消えた

旬「レイン？」

レイン「あなたは!!」

カナメ サイド

マシンガンの男にリングを奪われた俺はレインと名乗る少女と一時的に手を組む事を決めこれからの事について話していたその途中急にレインが震えだし顔が真っ青になる何かあるのかと後ろを振り返るとそこには黒い騎士の姿があった黒く塗っているわけではなく黒い何かで全身が出来ている、そして見た瞬間察したこいつはヤバい、あれこれ策を考えていると後ろにいたレインに更なる異常が現れた

レイン「う、うええええええええ、い、嫌だ、そんな死に方!!」

今まで冷静だったレインの姿をここまで変える存在に俺は咄嗟に手に持っていた銃を向けた

カナメ「おい!!、何者か知らねえけどこれ以上近づくな!!」

レイン「カナメさん!!止めてください!!死んでしまいます!!止めてください!!!」

俺の行動にレインも止めるように訴えかけてくる自分でもこれは最悪の選択だったと思う、だが死の恐怖が俺を咄嗟に行動に移させた、確実に終わった、それが俺が思ったことだった、しかもその後謎の男が現れた

匂「レイン?」

レイン「あなたは!!」

おいおいおいこれ以上何があるってんだ!!こいつだけでも手一杯処か手に余るって

のにこれ以上厄介な事になってくれるなよ頼むから!!

しかしこの直後、俺の願いはあっさり踏み潰される事になる

力の片鱗と花

旬「レイン？」

レイン「あなたは!!」

俺は涙や汗等でぐちゃぐちゃになった顔のレインに話しかける傍らには俺への警戒の為か銃を向け鋭い目付きでこちらを睨む少年と俺を守るように立つ影の兵士が立っているという状況が全く分からない

レイン「そいつは危険です!!、早く逃げて下さい!!!」

レインが俺を心配して叫ぶなるほどこいつを警戒してたのかまああの時詳しく話してなかったしこうなることも仕方ないか

旬「どうだった？」

俺は影の兵士に話しかけると兵士は跪き懐から2本のリングを取り出す、カメラで見るとラピスラズリとペリドットだった最初はこんなもんか、さて、これからどうしようかと考えていると少年が話しかけてきた

カナメ「おい!!、あんた何者ださっきのやつも消えちまったしあいつはあんたにリングを渡してたつまりプレイヤーだろ」

旬「ふむ、人に名前を聞く時は自分から名乗るべきだと思うがまあ良い、俺は水篠旬、君の言う通りプレイヤーだ、それで君は？」

カナメ「ああ、悪かった、俺はカナメ、スドウ　カナメ、あんたと同じプレイヤーだ、でもまだ俺の質問に答えて貰ってないぜ？」

旬「ああ、悪い、こいつは俺のシギルによるものだ俺の命令には絶対逆らわない忠実な兵士だ」

カナメ「なるほど、初めて見るな、にしてもすごい威圧感だ、こんなのシユカでも勝てないんじゃないか？」

旬「別に大した奴じゃないよ、シユカ？誰だ？」

レイン「以前話した無敗の女王です、そして彼はその無敗の女王に唯一黒星を着けた相手です、それにしてもそんな怪物を大した奴じゃないなんて謙遜を通り越して最早嫌みですよ」

旬「へえ、彼が、後本当にこいつは大した奴じゃない、ちょうど来たみたいだ」

レイン「え？」

カナメ&レイン サイド

旬さんが突如振り返り廊下を見る、何事かと私とカナメさんも見るそしてそれを後悔した、見なければ良かった見たくなかったと、そこには先程と同じ姿の兵士が10人程

旬さんに向かって頭を垂れていた、余りの事に私は咄嗟にカナメさんを見ると顔を青くし口がパクパク動いていた、恐らく私も似た用な顔をしているんだろうと思っているとカナメさんが話しかけてきた

カナメ「なあ、レイン」

レイン「言いたいことは分かりますが一応聞いておきます、何ですか？」

そう、こんなものを見せられて考え付く事は一つだ

カナメ「あの人と同盟を組みたい、交渉は任せて良いか？」

レイン「あなたの方が適任なのでは？」

カナメ「ふざけんな、俺は死の間際咄嗟に最悪の選択をする男だぞ？」

レイン「自覚あったんですね、でもそんなこと言ったら私は死の間際死にたくない」と

泣き叫ぶだけの哀れな小娘ですよ」

カナメ「それにお前の方が面識あるんだろうし、頼むよ」

レイン「はあ、貸し1ですよ」

カナメ「分かった分かった」

旬 サイド

兵士達に集めてくれたリングは全部で11個内訳はラピスラズリ4、ペリドット4、サファイア2、ルビー1、ペリドットとラピスラズリが多い、ポイントが低いから大量に配置されたのか？兎に角これで3人の安全は確保出来た、リングを3個つつ渡して隠れておくように言うべきか？、安全は影の兵士をつければ良いし、取り敢えず2人の意見を聞いてみるか

レイン「あの、水篠さん、少し宜しいのですか？」

旬「ん？」

レインが話しかけてきた、何かあったのか？、どちらにしる都合が良い此方も色々聞きたいことがあつたし

レイン「実は、私達に協力して欲しいんです」

旬「ん？、協力？」

レイン「はい、実は今私達はこのビルの中に閉じ込められています、エレベーターには罌が仕掛けられ、階段は途中で大木に防がれています、これは全て一人のシギル使いによつて行われています」

旬「シギル使い、植物を操る能力かな？」

レイン「はい、その人物は花屋、そう呼ばれるプレイヤーであると言う事、男である

と言う事以外良く分かってません」

旬「そいつを倒したいと？」

レイン「はい、それには貴方の力をお借りしたいんです、今回限りでも構いません、どうかお願いできませんか？、報酬として私が持ち得るあらゆる情報を提供します」

旬は考えた、報酬は悪くない、欲しい情報は山の用にある、それを手に出来るチャンスだ

旬「分かりました、協力しましょう」

レイン「本当ですか!?!、ありがとうございます!!」

カナメ「話は纏まったか？」

レイン「……ええ」(「?」?)

匂「よろしく、カナメ君」

カナメ「ああ、此方こそよろしく、それで？どうやって探す？と言うか降りる？ここまで居なかつたって事は多分下だろ？」

レイン「そうですね、やはりシヨップで爆弾を買いただけ買ってあの大木を吹き飛ばすしか」

匂「問題ない」

レイン&カナメ「え？」

匂「出てこい」

号令と共に10体の影の兵士が現れる

旬「行け」

号令と共に兵士達が飛び去る

レイン「あの水篠さん、いくら彼らが強くても罨も大木も壊せないのでは？」

旬「そんな必要ない、影は全て繋がっている」

レイン「え？」

旬「見つけた、一階セキュリティ室」

カナメ「は？見えるのか!？」

旬「行くぞ、2人ともこつちに」

カナメ「ああ」

レイン「はい」

旬「影の交換」

花屋 サイド

何故、何故こうなった、選択を間違えた、あれは敵にしてはいけない存在だった、芳醇で濃厚な死を纏うあの兵士を見た時が私が逃げる最後のチャンスだった、最早私に残された選択は抵抗して死ぬか抵抗せず死ぬかの2択だろう、私は椅子から立ち上がり彼を出迎える

花屋「よくぞ来た、死の王よ歓迎しよう」

旬 サイド

花屋「よくぞ来た、死の王よ歓迎しよう」

旬の周りから影が消えるとそこに1人の男がいた

旬「お前が花屋か？」

花屋「いかにも、私こそ花屋、君が死の王ならば私は植物達の王だ」

旬「そうか、じゃあやろうか」

花屋「ああ」

旬は短剣を花屋は植物で出来た全身鎧を纏うと互いに激突した、その衝撃で花屋の鎧はひび割れ旬の持つ短剣にはひびが入った、当然だろう旬が今使っている短剣はガチャで出たこの世界にある何の効果もついてないただの刃物なのだから花屋の鎧もただの人間に切りつけられればこうはならなかっただろうが最強の君主の力で切りつけられればこうなる、むしろ碎けなかつただけかもしれません。そうして植物と金属と言う差がここで現れ始めるひびが入ったままの旬の短剣に対し花屋の鎧はその傷をみるみる、回復させて

いく

旬「……なるほど」

花屋「ふふふ、植物とは案外強い物だぞ死の王よ君も知っているだろう!!アスファルトを割って咲く花を!!」

鎧や武器を植物を操る事で無限に武器を修復補充出来る花屋に対し旬は折れかけの短剣一本で戦っている、しかしこの戦いにおいて、旬の優位が覆えることはない、それは身体能力の差と経験の差に他ならない、花屋が戦い始めたのは精々数年だろう、しかし旬は30年と言う永い年月、休むこと無く戦い続けていた、その差は歴然だろう、やがて、均衡は崩れ花屋を覆う鎧が完全に砕けると同時に花屋は倒れ付した

花屋「私の敗けだ死の王よ、殺すが良い」

旬「……………」

匂は何も言わずボロボロのナイフを振り上げ後は下ろすだけ

レイン「待ってください」

その時レインが間に割って入った

レイン「花屋さん、私達に協力しませんか？そうすればまだ生きていられますよ」

花屋「協力？」

レイン「ええ、水篠さんは貴方を倒すことに協力すると言う条件で貴方と戦いました、しかし私達にはまだやるべき事があります、そこで貴方を仲間に加えたいのです、どうですか？」

花屋「はは、それはとても魅力的な提案だ是非協力させてくれ」

レイン「と言うわけですのでそのナイフをおろして頂けませんか？、お願いします」

すると同時に限界だったのかナイフが根本から折れ役割を終えた

旬「一先ず皆何処かの部屋で休みましようか」

レイン「ええ、その方が良いでしょうこれから事はその後と言うことで」

皆が部屋に戻る時カナメのスマホに一通のメールが入った

(差出人 シュカ)

(件名)

女王と水使いとの出会い

花屋との激闘を終えそれぞれ休息を取ろうとしていた時カナメのスマホに一通のメールが入った

(差出人 シュカ)

(件名)

(内容)

助けて

カナメ「…はあ!？」

匂「どうした？」

レイン「何ですか？、急に大声出して？」

花屋「何かあったのかい？」

カナメ「シユカからヘルプコールが来た、信じられねえがな」

冗談だと思いたいカナメは確認を取るためシユカに電話をかけるが一向に繋がる気配がない

カナメ「くそつ、どうやらマジらしい」

花屋「とにかく1度何処かの部屋に入って詳しい話をしよう、私が操っていた人間達も直ぐに目を覚ますだろうしな」

匂「ああ、そうだ……ん？、操っていた人間？」

花屋「ああ、私が植物達を操って、一種の催眠状態にしていた、本人達の意思に背く行動はさせないがね」

旬「…なるほど」

花屋の提案で一番近くの部屋に花屋が洗脳した人間を運び作戦会議に入る

カナメ「それで？どうやってシユカを助ける？」

レイン「正直言つて余り気乗りしません、シユカさんはトツプランカー、そんな彼女がピンチと言うことはそれだけ危険な何か、或いは誰かがいると言う事です」

花屋「だが、彼女を助ける事が出来ればそれだけ戦力として頼ることが出来る、彼はこの後直ぐに去るのだろうか？」

レイン「恐らく、今回もビルから脱出するのを助けると言う契約ですから」

すると花屋に操られていた最後のプレイヤーが目を覚ます、今まで目を覚ましてきたプレイヤーにも協力を要請したが全て断られた

??? 「んん」

旬 「目が覚めたか」

??? 「ああ？、何だあんた？ここどこだよ？」

旬 「まあ、その辺は彼女に説明して貰おう」

旬はその言葉と共にレインを見る

レイン「カナメさんもそうですが、大事な交渉を私に押し付けるの止めて貰えませんか？」

旬「君はそう言うの得意そうだからね」

レイン「全く」

ブツブツと文句を言いながらも目覚めたプレイヤー、リョージに説明と協力を頼むレインしかし

リョージ「つまり、トップランカー様がピンチだから助けに行こうぜってか？、そんなの御免だね、俺は俺で殺したい奴がいるし俺だって命は惜しい、ただまあこのイベント期間中は襲わないこと位なら約束してやる、じゃあな」

さっさとその場を去ろうとするリョージ

花屋「仕方無い、一先ず、シユカさんを助けたとしてその後は？」

レイン「最終目的は渋谷最大規模のクラン、エイズとそのリーダー、王（ワン）」

リョージはドアノブにかける手を止めレインに怒鳴り付ける用に叫ぶ

リョージ「おいクソガキ!!、今王（ワン）って言ったか!!?」

レイン「何ですか?、イベント中は手をださないんじや無いんですか?」

リョージ「うるせえ!!、質問に答えろ!!」

その間に割って入る匂は若干の威圧を込めた声でリョージを止める

匂「おい、落ち着け」

リョージはその覇気に気圧されたのか若干後退る

リョージ「ツ!!、悪かった、王（ワン）は俺の怨敵だ、気が変わった、トツプランカー救出とエイス狩り、俺も乗らせて貰う!!」

こうしてエイス狩り作戦にリョージが加わった、が

旬「なあ、話の腰を折って悪いが、エイスとかクランとか何だそれ？」

そう、旬はなにも知らなかった

レイン「ああ、クランと言うのは要はプレイヤー同士が作るチームの事です、そして渋谷で最大規模のクランの名前がエイスです、」

旬「なるほど」

花屋「それでシユカさんの救出だが場所は分かっているのか？」

カナメ「ああ、メッセージと一緒に位置情報が送られてきた、間違いなくここだ」

花屋「これは、地下鉄か？」

レイン「幸いにも今、戦いは落ち着いています、今のうちに向かうのが最善です」

カナメ「ああ、そうだな、じゃあちよつと行ってくる、プレイヤーに見つかるで行けねえからリングは置いていく」

リョージ「待てカナメ、俺も行く」

匂「俺もついていこう」

カナメ「良いのか？、二人とも無理して着いてくる必要ないぞ？」

匂「折角だ着いていくよ」

リョージ「トップランカーが追い詰められる用な場所だ、人数が多いに越したことはない」

カナメ「助かる」

花屋「二階のバリケードは解除しておいた」

カナメ「分かった」

こうして3人でシユカ救出に向かうのだった

そうして向かう途中カナメがリョージに話しかけた

カナメ「そういや、リョージのシギルは何なんだ？」

リョージ「ああ？、ああ俺のは別に大したことねえよ嘘発見器（トウルーオアライ）俺は他人の嘘を見抜くことが出来る」

カナメ「へえ、便利だな」

リョージ「便利なもんか、世の中を嫌いになるだけだ、て言うかそつちの奴のシギルは何なんだよ」

旬「俺か？、俺は兵士を出すことが出来る」

すると旬の影から一体の兵士が現れる

リョージ「へえ、すげえな」

そうこうしているうちに目的の地下鉄の入り口に到着するが

カナメ「何だこりやあ？」

そこには入口から溢れんばかりに揺らめく水があつた

リョージ「間違いなく誰かのシギルによるものだな」

旬「なるほど、地下鉄に水そのトップランカーは溺死を狙われたか」

リョージ「ツ!!、誰だ!!」

リョージの言葉にいち早く反応したのは旬だった、リョージの銃口の先を確認しナイフを投擲、勿論当てるつもりは無いので相手は無傷だろう、しかし隠れていたであろう壁は粉々にくだけ散った

??? 「ひゃあ!!」

後ろに隠れていたであろう人物が悲鳴に似た声をあげ土煙が晴れ現れる

カナメ「女の子?」

そこには、白いフード付きパーカーを着た白髪の女の子がいた、このままの姿で雪原の中に連れていけば雪の精と間違えられそうな美しい顔立ちをしている

リョージ「油断すんな、見た目は子供でもすげえシギル使いの可能性もある」

カナメ「ああ」

そんな二人の会話を無視し、旬は無防備に少女に近づく

旬「怖がらせて悪かった、大丈夫？」

??? 「え？、あの、はい」

旬「そうか、良かった本当にごめん、悪い奴かと思つて、俺は水篠旬、君は？」

??? 「あ、わ、私スイって言います!!」

二人が握手をかわす

旬「ツ！、君は」

スイから何か感じた旬はスイの顔を覗き込んだ

スイ「え、えっと、あの」

その事に戸惑うスイ、余談だが匂は背が高く、イケメンの部類に入る、元の世界でも妹の友達、病院の看護師、果てはSランクハンターや悪魔の娘までが匂の虜になった、つまり何が言いたいかというところ

スイ「ツ~~~~／／／」

当然こうなる

カナメ「とにかく、この先にシユカがいる」

そう言うときカナメが上を脱ぎ始める

リョージ「おい!!、マジか?、この先何があるかもわかんねえんだぞ」

スイ「あ、あの!!、その先は危ないと思いますよ?」

リョージ「ああ?、何だガキ、何か知ってるのか?」

スイ「い、いえ、何も知りませんけど」

カナメ「とにかく15分しても俺が戻らなかつたら俺のリングはその子にでもあげてくれ」

リョージ「つたく、なんて奴だ」

するとリョージは急にスイに銃口を向ける

スイ「ひい!!」

リョージ「さてガキ、お前1つ嘘を吐いたな、お前はこの現象についてよく知っている、さあ洗いざらい吐いてもら…ッ!」

すると突然リョージの足元のマンホールから水が吹き出しスイが走って逃げ出した、しかしその少女にとっての不運はこの場に彼がいたことだろう、黒紫の閃光が1つ走ると途端にスイは匂に捕まった

スイ? 「なっ!!、ちくしょく!!、離せよ!!」

先程までの穏やかな表情と口調が消え変わりに荒々しい恫喝にの声を出すスイ、しかし匂は慌てること無く言い放つ

匂 「なるほど、お前がそうか」

匂がそう言うのと慌てて追ってきたリョージが匂に聞く

リョージ 「どう言うことだ?」

匂 「この子は二重人格だ、しかも死んだ人間の人格を宿した」

リョージ「ああ？、二重人格だ？」

旬には生物の死んだ場所に死者の痕跡が見えるそしてスイにも同じ痕跡が見えた、つまり彼女は死者の魂を宿している事になる

スイ「ソ、ソータ!!落ち着いて」

スイ(ソータ)「うるせえスイ!!、大体お前が使えないからこんなことになってンだろ!!」

旬「見ての通りだ」

リョージ「はあく、変わった事があるもんだな」

旬「さて、聞かせてくれないか？君達の事」

それからスイはぼつぼつとこれまでの事を話し始めた

兄弟が死んで悲しかった事

願いを叶えてくれるゲームの噂を聞いた事

そしてダーウィنزゲームに出会いソータを取り戻した事を

匂「そうだったのか」

リョージ「俺もまともな人間じゃねえが、胸糞悪いなDゲーム、こんなガキを引つ掻き回しやがって」

そうこうしてる内にカナメが赤いゴスロリ衣装を着た少女を抱え戻ってきた、

匂「とにかく、何処か建物に入ろう、二人とも風邪を引く」

それから十数分後近くのコンビニに入りシユカが目を覚ました

シユカ「……で？、カナメを呼んだのは私だから良いとして、こいつら誰？、後何であんたがここに居るの？」

カナメ「まあ、そう言うなこいつらだってお前を助けるために手伝ってくれたんだ、紹介しよう、こつちのマシガン持つてる方がリョージ、こつちの短剣使いが旬だ」

リョージ「よろしくな」

旬「よろしく、」

シユカ「ふうん、まあ一様お礼言っておくは、ありがと、で？、あんたは？」

スイ「え、えつと、私は」

シユカに凄まれたただ怯える事しか出来ないスイ流石に可愛そうに思ったカナメが

フォローに入る

カナメ「彼女にも今回の作戦に参加して貰う、凄いシギル使いがいればそれだけ成功率が高まるだろ？」

シユカ「カナメがそう言うなら別に良いけど」

カナメ「よし、とりあえず戻るぞ、ここは危険だ」

シユカ「待ってカナメ、その前に着替えたいんだけど」

スイ「あ、あの、良ければ私のシギルで乾かしますけど」

そう言うときスイはシギルを発動しシユカとカナメの服から水分を取り出す

シユカ「へえ、貴方のシギル気に入ったかも」

すると、再びカナメのスマホにメッセージが入る

メッセージを確認するとカナメはシユカに話しかけた

カナメ「シユカ、エメラルドのリング持ってるか？」

シユカ「一個持ってたと思うよ」

カナメ「貸してくれ」

リングを確認するとカナメはメッセージを送る、すると少しして再びカナメのスマホにメッセージが入る、それを確認するとカナメはシユカに再び声をかけた

カナメ「シユカ持ってるリングは全部捨てろ、そいつらにもう用は無い」

(差出人 レイン)

(件名 宝の在りかが分かりました)

最低最悪の愚王

カナメ「レイン戻ったぞ」

レイン「お帰りなさい、お待ちしてました」

カナメがメッセージを受け取りシユカがリングを捨てた後、匂達は最短距離でビルに戻ってきた

匂「それで？、宝の場所が分かったって？」

レイン「はい、ですが同時に問題も見つかりました」

カナメ「問題？」

レインが説明する、リングの内側を見るとそれぞれの宝石事に数字が現れるQRコード

ドの様なものがついておりカメラを使うことで数字が現れる仕組みになっていた、世界関数（ラプラス）を使い調べた結果宝石の硬度順に並べると渋谷のとある場所を指す緯度と経度を表していると言う事が分かったそしてそこは渋谷駅の南口であるらしい

カナメ「でもまだダイヤが残ってるだろ？」

そう現在時間帯は夕方この段階でまだダイヤのリングは見つけられていない

レイン「ええ、それが問題の1つ目です」

匂「1つ目？、まだ何かあるのか？」

レイン「流石水篠さん、その通りです、もう1つ、エイスが武器の調達を始めました」

カナメ「!!」

匂「……」

レインはそう言うのと横に置いてあったパソコンの画面を皆に見えるよう動かした、ここにはエイスの証であるジャージを着た男がアプリのシヨップシステムを利用し手榴弾を買う光景が写っていた

そしてそのタイミングでもう一つ最悪の知らせを告げる音色が全員のスマホから流れた

メッセージ

(リングの再配置を行うよう、現在渋谷○○ビルの屋上にダイヤのリングを一個配置しました、早い者勝ちだよ)

カナメ「くそがつ!!」

レイン「カナメさん、急いで向かって下さい!!、誰かに捕られたらそれこそ最悪です、幸いここからそれほど距離はありません!!」

カナメ「ああ、分かった!!」

句「俺も行こう、俺なら時間稼ぎにぴったりだ」

カナメ「悪いけどその時は頼む」

こうして句とカナメはダイヤリング獲得のため動き出した

レイン「私達も準備を始めましょう」

そうして各々が準備を開始する

いち早く準備を終わらせたレインはビルの屋上で花屋と話していた

レイン「本当に来ないんですか？」

花屋「ああ、君達の言う真のお宝が本当にあるか分からない以上私は動くことは出来
ん、私は1ポイントでも多く獲得したいんだ」

レイン「娘さんの為ですか？」

花屋「流石、情報が早いな、ああ、娘が病気でね、目が見えない、治すには多くの金
が要る、今このビルにあるリングだけでも優に二億にはなるだろう」

レイン「言っておきますが、今このビルにはエイスのメンバーが向かってきています、
貴方一人では死んでしまいますよ？」

花屋「そんなことにはならんさ、ここは私の庭だ」

レイン「そうですか」

レインのスマホにメッセージが届く

レイン「カナメさん達は上手くやったみたいですが、私はこれから例の場所に向かいます」

花屋「レイン君」

レイン「はい？」

花屋「私が死んだら、保険金は娘に渡るようになっていて、娘に全額渡ったか君が確認して欲しい」

レイン「死ぬことは無いのでは？」

花屋「念のためさ」

レインは何も言わずその場を去った

数時間後 花屋の占領したビル

花屋「やあ、出迎えが遅れてすまない、歓迎しよう!!、エイス諸君!!」

この日一棟のビルと共に一輪の花が散った

レイン「これは想定外の事態ですね」

レインは南口の中にある影に隠れていた、と言うのも既にエイスマンバーが集まり巡回していたまだ宝が捕られていない事を考えると謎を解いたわけではなく人海戦術で怪しい所を片っ端からマークしているだけらしい

レイン「くっ、恐らくイベントに呼ばれなかったメンバーも使っているでしょう、イベント参加は300人からだったのに明らかに100人はいる、イベント参加メンバーの1/3がエイスなんてあり得ませんからね」

すると反対側から二人組のエイスマンバーがやってくる

エイス1 「しかしこんな所に誰かくんのか？」

エイス2 「うるせえ、王（ワン）さんからの命令だ、黙ってやれ」

二人組がレインの隠れた場所を通りすぎた、と思った時二人組の内一人が足を止めた

エイス1 「どうした？」

エイス2 「匂う」

エイス1 「ああ？」

エイス2 「俺の狼の鼻（ウルフズハート）が女の匂いをかぎ分けやがった」

レイン（まずい!!）

そう思ったレインは影から飛び出し自分に近付いてきていたエイスマンバーにカナ

メから借りたスタンガンを押し当て電流を流すと同時に世界関数（ラプラス）を発動させ最善の脱出ルートを探した、世界関数（ラプラス）が示した中で最も逃走成功率が高いルートを通り最後の一人を振り切った時その男は現れた

王（ワン）「ばあ!!」

レイン「ツ!!、王（ワン）!!」

突如現れた王（ワン）に驚きながらも即座に切り返し逃れようとするが目の前と言う超至近距離に現れた王（ワン）に呆気なく捕まってしまう

王（ワン）「さてさて、子猫ちゃん、こんな時間にこんな場所で何をしているのかな？、お兄さんに教えてよ？、探し物？、例えばお宝とか？」

レイン「何を、私まだ子供ですよ？、そんなもの知るわけ無いじゃないですか」

王（ワン）「おととつとつ、嘘は吐かない方が良いぜお嬢ちゃん、俺様嘘はきらいな

んだ〜」

レイン「だから、そんなもの知らないっていつ〜」

その時レインは激痛を覚えた余りの衝撃に思わず激痛の元に目が行く、無い、あるべきものが無い、右肩から先そこにあるべきものが無いのだ、

王（ワン）「あらら〜、どうしたのお嬢ちゃん？、もしかして探し物はこれかな？」

そこには自分の右腕を持つ王（ワン）の姿、そして同時に漸くレインは理解した、こいつに腕を切られたのだと

レイン「あ、あああああああ!!!」

王（ワン）「ギャハハハ、バカだね〜きつきさと情報吐けば骨折位にしといてやったのに」

レイン（痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い!!!）

痛みへのうち回りながら逃げよることを諦めないレイン、そしてそれに気が触れたのか王（ワン）は怒りの表情を見せる

王（ワン）「ああ？、何だ、まだ自分の立場が分からねえ様だなガキが!!!」

レインが蹴りあげられ痛みで悶え力が入らない体は軽々と宙を舞い再び地面に倒れ伏す、事はなく優しく受け止められる、レインの意識はそこで途絶えた

匂「……………」

王（ワン）「ああ？、誰だ？てめえ」

匂は答えること無く地面にそつとレインを座らせる

匂「……………ベル、この子に治療を」

ベル「ハッ、かしこまりました」

旬の影から飛び出し即座にかけより治療するベル

旬「……楽に死ねると思うな？、最低最悪の愚王」

王（ワン）「クツクツクツクツ、何だ新たな自殺志願者か、じゃあ早速、死ね!!!」

すると旬はその横を通りすぎ、一本の短刀を突き刺した、途端に王（ワン）は吐血しその場に倒れ伏す、それはかつて彼が最初に倒した強敵、巨大な毒蛇の牙を加工し作られた短剣、カサカの毒牙

王の鉄槌

カサカの毒牙を片手に倒れ伏す王（ワン）を見下す旬、エイスのメンバーはその光景に何も出来ずただ立ち尽くすしか無かった、そんな静寂を破る黒い影が一つ

ベル「王よ、治療が完了いたしました」

旬「そうか、ご苦労、イグリット」

名前を呼ばれ影から飛び出したイグリット

イグリット「お呼びでしょうか」

旬「レインを外に連れ出してくれ、そろそろカナメ君達が合流するはずだ、ベルにはやって欲しい事があるし」

イグリット「かしこまりました」

レインを抱え外に飛び出すとベルが話しかける

ベル「王よ、ご命令を」

旬「ああ、今から~~~~~」

ベル「かしこまりました」

旬「さあ、王（ワン）精算を始めよう」

カナメ サイド

プレイヤーとの遭遇が多く旬に大きく遅れる事となったカナメ達も目と鼻の先に来ていた

カナメ「くツそ、思ったより時間食っちゃった」

スイ「レインさん、無事だと良いんですけど」

リョージ「大丈夫だろ、匂もいるし」

シユカ「カナメ、あの人そんなに強いのか？」

カナメ「ああ、少なくとも正面から戦って勝てる気はしない、だからって不意した所で」

リョージ「あの兵士が何処からともなく現れて串刺し、だな」

カナメ「ああ、全くどうなってる、あの子のシギルは、つと、ここだな」

シユカ「ねえカナメ、あれレインじゃない？」

カナメ「ああ？、本当だ何でこんな所で寝てる、近くにエイスがいるってのに」

カナメがレインを起こそうと近付いた時突如レインの影が広がりがりイグリットが姿を表した、カナメ達は驚き咄嗟に武器を構えるも、すぐに匂の兵士だと気付き武器を下げた

イグリット「お待ちしてました、王の友よ、私はイグリット、王にお仕えする第2元帥です」

因みに第2元帥とは、ベリオン、イグリット、ベルの位を表す、初代も含めて影の君主に仕えるのが長い順に第1、第2、第3元帥となるイグリットはこの中でベリオンに続き2番目に仕えた期間が長いため第2元帥となるがカナメ達が驚く要因はそこではない

カナメ「へ、へえ、イグリットさんね、まさか喋る兵士がいたなんて、て言うか階級があるなんて知らなかった、恐れ入ったよ、とりあえずレインを起こしても良いかい？」

イグリット「構いませんが、起きた途端に取り乱される可能性がございます」

カナメ「は？、何で？」

イグリット「彼女はおろかな王に右腕を切り飛ばされた所を我が王に助けられ気を失った後、我が同僚によつて右腕を再生されました、つまり彼女の中では、右腕を切り落とされた時の記憶のままと言うことになります」

カナメ「……色々ツツコミどころがあつたが取り敢えず分かつた、じゃあ気をつけて起こすようにするよ」

イグリット「それがよろしいかと」

カナメはレインに近づきレインの肩を揺する

カナメ「おい、レイン」

レイン「ん？んん、私は？」

カナメ「レイン、大丈夫か？、何処か痛い所無いか？」

レイン「は！腕!!!、私の腕が!!!、ある？」

カナメ「匂さんがシギルで治してくれた、大丈夫だ」

レイン「…そうですか、あの人が／／／」

カナメ「よし、中に入るぞ、いくらあの人が強くても100人の相手は厳しいだろうし、宝の確認もしなきゃいけない、イグリットさん、悪いけど案内頼める？」

イグリット「かしこまりました」

イグリットに案内され慎重に歩みを進めるカナメ達、一方イグリットは剣を抜く事も

なくツカツカと無造作に歩みを進める

カナメ「イグリットさん、もうちよい慎重に行こうぜ、何があるか、分からないから」
イグリットは堂々と言う

イグリット「大丈夫ですよ、我が王と敵対して助かった者を私は見たことありません」

カナメ「へ、へえ〜」

イグリット「こちらです」

カナメ達「ツ!!!」

そこは死地、ただ死のみが渦巻く空間に囚われた哀れな王と死を支配する絶対なる王、されど哀れな王は死に絶えてはいない、

王（ワン）「うぎやあああああ!!!」

振り下ろされる短剣と吹き飛ぶ手足、すかさずベルが手をかざすと切り落とされた手足が瞬く間に再生され完治すると再び短剣が振り下ろされ手足が飛ぶ、それを何百回何千回何万回と繰り返した痕跡誰もがその空間に飲み込まれるなか構わずイグリットは匂に跪く

イグリット「王よ、皆様をお連れしました」

匂「ご苦労イグリット、さて王（ワン）そろそろ精算を終わらせる時が来たようだ、が、お前は運が良い、お前がいなきやエイスの残党が面倒臭そうだ、故にレインと同じ右腕で勘弁してやる」

王（ワン）「へ？」

短剣が振り下ろされる

王（ワン）「うぎやあああああ!!!」

しかし今度はベルによる治療は無く痛みが続く

旬「これに懲りたら二度と悪さしないことだな」

カナメ「……終わったかい？」

代表してカナメが話を振る

旬「ああ、奴がこれで懲りているならな、さあ宝を貰いに行こうか」

イベント勝者

王（ワン）の制裁を終えカナメ達と合流した匂、ベルを影の中に仕舞いイベントクリアの為ロッカーの前に来ていた

カナメ「どうした匂さんダイヤに書かれてた番号打ち込めばイベントクリアだぜ？」

匂「……これは君がやると良い」

カナメ「はあ!?!、何言ってるんだ、ここまで来れたのも匂さんのお陰だろ?、何で俺なんだよ!?!」

匂「俺は自ら望んでこのゲームに参加した、でも君は巻き込まれただけ、なら君はゲームマスターに文句を言う権利がある、それだけ」

レイン「でも良いんですか?、このイベントのクリア者には絶大な特典が与えられる

と言われています、それをみすみす逃す事になるんですよ？」

旬「ああ、俺はそんなの興味ない」

カナメ「本当に良いのかよ」

旬「ああ」

カナメ「ありがとう、旬さん」

カナメは進み出るとロッカーに暗証番号を入力した瞬間、イベント参加者全員の周りに青い枠が現れ次々エリアから消えていく

スイ「イベント終了って事ですかね？」

レイン「恐らくそうですね」

リョージ「へっ、またなお前らなかなか面白かったぜ」

そしてその場にカナメのみが残されロッカーの扉が開き箱が現れ恐る恐る箱を開けた、中身は

カナメ「スマホ？、こんなものの為に戦ってたのか俺達」

するとスマホの電話になる

カナメ「もしもし？」

スマホ「やあ、イベントクリアおめでどう、スドウ カナメ君」

カナメ「誰だあんた？」

スマホ「おや？君ならとつくに気付いてるんじゃないかな」

カナメ「そうか、あんたが、あんたがゲームマスターか!!!」

スマホ「ピンポンピンポン、大正解く、スドウ カナメ君に1000ポイント!!!」

するとカナメ自身のスマホに1000ポイントの表記が入る

ゲームマスター「さて、まずは今回のイベントクリアの報酬を確認しよう、まずはポイント、君の合計獲得ポイントは6750ポイント、さて副賞はこれくらいにして改めて聞こう、君は僕に何を求める？」

カナメ「何を?、そんなもんさっさとこのクソツタレのゲームから解放しやがれ!!!」

ゲームマスター「それは出来ない、それは僕の目的達成に反する」

カナメ「くそつ、何でもって言うっておきながらダメじゃねえか!!!」

ゲームマスター「さあどうする?、僕に出来る範囲なら好きに出来るよ?」

旬「後から言い直すなんてゲームマスターもなかなかセコいことするんだな」

すると突然後ろから飛ばされた筈の旬が声をかけてきた

カナメ「旬さん!？」

ゲームマスター「おやおや?、これは珍しい侵入者だ」

旬「やあゲームマスター、はじめまして、俺は水篠旬、世界の外側から来た人間でかつ2代目影の君主だ」

ゲームマスター「ご丁寧にどうも、私はこのゲームを支配する、ゲームマスター、生憎名前は控えさせて貰うよ」

旬「早速で悪いがゲームマスター、あんたは俺を元の世界に還す事は可能か？」

ゲームマスター「なるほど、君の目的はそれか、生憎私はその力を持つてはいても君の世界を知らないから還す事は出来ないんだ、ごめんね」

カナメ「ちよつ、ちよつと待て!!、元の世界に還すつて!?!、しかもここに居るのも!?!」

旬「ああ、俺は元々この世界の人間じゃない、ゲームマスターに会うために君を隠れ蓑にさせて貰った、ごめんね?」

カナメ「……なるほど、俺はまんまと騙された訳だ」

旬「報酬と言つては何だが特典は君の好きな物にすると言い」

ゲームマスター「ああ!!、忘れてた、さあカナメ君何にする?」

カナメ「くッそ、そんな急に、あ」

ゲームマスター「ん?」

カナメ「俺の望みは……………」

ゲームマスター「はは、面白いんじゃない？良いよ、その特典認めてあげる、じゃあまた会える事を願ってるよ、イベントクリア者と世界の外側からの人間」

するとカナメの体が青い枠に囲まれ消え、次にスマホが消えた

旬「さて、帰るか」

数カ月後 エイス本部

エイスメンバー「駄目です王（ワン）さん、あいつらの手がかり一つも見つかりません、奴らの家にも行ってみたんですが、誰一人家にいません、あの野郎も泊まっていた寝カフエさっさと引き上げてます」

王（ワン）「くそくそくそくそ!!!、あの野郎!!!、殺す殺す殺す、覚えてろ!!!」

とある道場

ダンジヨウ「ううむ、これは何とも素晴らしい!!!」

ベル「キエエエエエエ!!!」

カナメ「どわっ!!!」

そこではカナメとベルによる模擬戦が行われていた、カナメが作り出す武器を使わせる間もなく尽く破壊するベル、対してカナメもフラッシュバンや手榴弾を使い何とか隙を作ろうとしている膠着状態、と言ってもベルは旬に殺すな、本気は出すなと命令されている、ベルが本気になればカナメは一秒と持たないからだ

ダンジヨウ「あの蟻の破壊力もそうだが、彼の戦闘センスも素晴らしい」

旬「で、彼の提案受け入れてくれるか？」

ダンジョウ「無論問題ないが、1つ頼みがある」

旬「ん？」

ダンジョウ「カナメ殿と戦わせて欲しい」

旬「それは本人に聞いてくれ」

ダンジョウ「そうか、カナメ殿!!!」

カナメ「ん？、あ、やべっ!!!」

ベル「キエエエエエエ!!!」

ダンジョウに気を捕られベルの拳が入る、ところがベルは拳を当てること無く寸止め
に留めた

ダンジョウ「すまん二人とも、しかしカナメ殿、俺とも立ち会って欲しい、無論本気
で」

カナメ「へえ、本気ってさ、シギルありってこと？」

ダンジョウ「無論!!、何でもあり（バーリトウッドウ）が俺のやり方（スタイル）だ」

模擬戦とお出掛け

イヌカイ「それでは、ルールを説明します、と言ってもうちの師範が言った通り、シギルを含め何でもあり、ただし、命に関わるような攻撃を行った場合即終了その人の負けです、良いですね？」

カナメ「へえ、本当にシギル使って良いんだな？、俺のシギル知ってて言ってるのか？」

ダンジョウ「無論、故にどんな武器を使おうと構わん、そうだな、では君のシギル発動を開始の合図としよう」

イヌカイ「ちよつ、師範!!!、審判は俺でしょ!?!」

カナメ「そうか、じゃあ遠慮無く」

すると突然カナメの手の中にリョージと同じマシンガンが出現した、しかしそれと同時にダンジョウも目の前に迫っていた、シグルを使う前に移動したとかそんな次元じゃない、文字通り急に目の前に現れる感覚、しかしカナメは落ち着いて一歩後ろに下がるとマシンガンを投げつけガチャで手に入れたハンドガンと短刀を出現させ構える

レイン「カナメさん、接近された時の対応上手くなりましたね」

リョージ「まあ、ここ最近ずっとあの蟻にボコボコにされてたからな、嫌でも接近された時の対応をするさ」

レイン「所でその例の蟻と匂さんは何処に？、さっきまで居ましたよね？」

リョージ「ああ、何でもスイにつれ回されてるらしい、あの人の兵士の絵を描くんだと」

レイン「ほう」

リョージ「おいおい、想い人取られたからってそんな声出すなよ、良いだろ別に、それにあの人のからしたらスイは娘見たいなもんだろ？、ここは年上の余裕って奴を見せ
てやれよ」

レイン「べ、別にそんな事分かってます、ええ、良いですとも、ここは寛大な心で待ちましようとも」

リョージ「想い人って所は否定しないんだな」

レイン「そつ、それは!!!」

リョージ「おいおい、恋は盲目とは言うが、解析屋としての仕事はしてくれよ？」

レイン「分かっています、そろそろカナメさんの方も決着つきそうですね、ん？」

リョージ「どした？、あ？、誰だあれ？」

そこには長い髪を1つに纏めた狐面の女がいた

旬&スイ サイド

スイ「おお、格好いい!!!」

ベル「……………王よ」

旬「我慢しろ」

それはキラキラした目をしながらベルを好き放題弄くり回し思い思いのポーズを取らせそれを次々絵に納めるスイの姿だった

スイ「ベルさんベルさん!!、次はここをこうしてこっちはこうで……」

ベル「……………王y」

旬「我慢しろ」

それから数時間後

スイ「旬さんありがとうございます!!!、とつても楽しかったです!!!」

旬「そうか、それは良かった、ベルが気に入った?」

スイ「はい!!!、ベルさんは良いなく空が飛べて、私もベルさんやシユカさんみたいに空を飛んでみたいです!!」

旬「……………じゃあ飛んでみる?」

スイ「へ?」

旬「ちよつと失礼」

スイ「え？、ひゃあ!!!／／／」

旬はスイを抱き抱えある者の名を呼んだその名は旬が主に移動に使う兵士の名

旬「……カイセル」

すると旬の影がどんどん大きくなりそこから一匹の飛竜が現れる

カイセル「グウワアアアアア
!!!!!!」

旬達を背中に乗せると翼を羽ばたかせ空に飛び上がった

旬「どう？」

スイ「ふわあああ、凄いです!!、とっても綺麗です!!!」

旬「そっか、それは良かった」

スイ「はい!!、旬さんありがとうございます!!!」

すると旬のスマホが鳴り出す

旬「もしもし?」

リョージ「旬か!?、悪いがすぐに戻ってきてくれ!!」

旬「何かあったのか?」

リョージ「ああ、最悪な事にカナメがさらわれた!!」

旬「!!、相手は」

リョージ「信じらんねえ事に日本ランキング1位様だ」

旬「分かったすぐ戻る」

スイ「何かあつたんですか？」

旬「とにかくまずは拠点に戻ろう、話はそれからだ」

スイ「そうですね、とにかく戻らないと」

余談だがこの日から、スイのスケッチモデルはベルからカイセルに変わることが多くなるのだが、ベルは安心する反面何処か負けた気がするようになったらしい

夕暮れ時の烏達

リョージからの一報を受け急いで拠点に戻って来ていた

シユカ「カナメが拐われたってどう言うこと!!、あんた達あそこにながらに何してたわけ!!!?」

スイ「シユカさん落ち着いて下さい、とにかくお二人の話聞きましよう?」

シユカ「うるさい!!、あんたも串刺しにされたいの!!!?」

スイ「ひい!!!」

旬「落ち着け、今俺の兵士達が探してる、……見つけた」

シユカ「本当!!!」

旬「ああ、だがこれは、急いで追った方がいい向かってる方向的に空港だな、出るのは恐らく明日、今追えば今日の夜には追いつける」

シユカ「リョージ車だして!!!」

リョージ「お、おう」

旬「ベル、お前は先に追って車の足止めをしろ、ただし足止めだけだ、車を壊してカナメ君まで怪我したら目も当てられない」

ベル「かしこまりました、王よ」

スイ「あ、あのカイセルさんに乗っていくのは……」

旬「あいつは目立ちすぎる、イベントの時は良いが一般人の前に出すわけには行かない」

カナメ「はっ、情報不足だぜ、No. 1!!!、前のイベントのクリア者は俺でも、俺の知る限りお前の旦那に合いそうな男はあの人だけだ、けど、逆にお前が見劣りするかもな!!!」

??? 「何？」

カナメ「勝負だ雪蘭!!!、俺達、夕暮れ時の烏達（サンセットレーペンズ）から逃げきつて見ろ!!!」

その時お互いのスマホが闘いの始まりを告げる

バトルスタート

サンセットレーペンズ サイド

匂「いた」

シユカ「リョージもつとスピード出して!!」

リョージ「無茶言うな!!、これでもアクセルベタ踏みだ!!、距離は縮まつてる、もう少し待て!!」

シユカ「~~~~~!!、旬!!!何とかしてよ!!!」

旬「……………」

なにも言わず旬が右手を前に出した、すると突如前の車が減速し徐々に距離が近付いていく、それは影の君主たる、旬の権能、全てを支配する力、支配者の権能によるものだった、ほぼ真横に着くとシユカは鎖とワイヤーを手に隣の車に飛び乗った

雪蘭「ほう、なかなか度胸のある娘だ、女はそれで無くてはな」

シユカ「女とか男とか知らないけどあんたは殺す!!」

雪蘭「ほう、面白い」

雪蘭が殺気を放つ、それはシユカに向けられたそれはやがて刃となり、シユカを襲う、事は無く更なる殺気に碎かれるイメージが押し寄せた、

雪蘭「ッ!!」

慌てて殺気の元を辿るとそこには1人で宙に浮く旬の姿があった

雪蘭はその姿を見た時幾つものイメージを見た、それは無限を越える自分の未来、斬り殺される、裂き殺される、殴り殺される、蹴り殺される、撃ち殺される、叩き殺される、轢き殺される、無限に見える無限の悲劇、しかしそのどれをとっても結末はただ1つ、己の死のみ

雪蘭「~~~~ッ!!、爺!!」

爺「はっ」

雪蘭「撤退だ!!、急げ!!、兎に角今は奴から少しでも遠くに!!」

ドガンツ
!!!!!!

突如車の天井から音が響き、辺りに土煙が充満する

雪蘭「くそっ!!、何処だ!!」

雪蘭が慌てて辺りを見渡す、確実に彼がいる、見つけなければ自分の命はない、雪蘭の頭の中はその事でいっぱいだった、次の瞬間、彼女が見たのは自分の喉元に短剣を突きつける匂の姿だった

カナメ「よお、待ってたぜ匂さん」

匂「君はトラブルに巻き込まれる体質らしい、俺、王（ワン）、そしてこいつ」

カナメ「本当だよ、まったく、俺はいつからこうなっちまったのかね〜」

こいつらは正気か!?!、それが雪蘭の考えだった、殺しを生業としている自分でも命を摘み取る際は思うところがある、そして今一人の人間の命を摘み取ろうとする男とそれを目の前にしている男、何と彼らは談笑している、おまけに今自分に短剣を突き付けている男からはこれまで感じたことの無い程の死の気配を漂わせている、どんなに鈍感な者でも気付くはずだ、彼は特別だと、それでも自分が言い寄った男は気に止めること無く仲良く談笑しているのだ

雪蘭「カナメ!!、彼は何者だ!!」

カナメ「言ったら、お前に見合いそうな男だつて」

雪蘭（冗談ではない!!!、こんな男の側には命が幾つあっても足りないではないか!!!）

雪蘭は人生で初めて、死の足音を聞いた気がした

匂「さてじいさん、車を止めて貰おうか？」

爺「……………かしこまりました」

車が止まり、全員が車外に出る

シユカ「カナメ!!!」

カナメ「シユカ、心配かけたな」

シユカ「ううん、カナメなら大丈夫って信じてた」

カナメ「そっか、さて雪蘭」

雪蘭「なんじゃ？」

カナメ「勝負は俺達の勝ちでいいな？」

雪蘭「無論だ、あんな男を相手にさせられては、なにも出来ん」

レイン（ランキング1位にここまで言わせるなんて、彼は何者何だろう？）

カナメ「じゃあ要求だ、俺達のクランに入れ」

シユカ「はあ!？」

スイ「ええ!!？」

リョージ「おい、マジかカナメ!!？」

カナメ「ああ、多分近々エイスがまた仕掛けてくる、その時切れる手札は一枚でも多い方がいい、それにいつまでも旬さんに頼ってばかりじゃいられないからな」

雪蘭「合い分かった、しかしこちらにも色々準備がある、暫し時間を貰うぞ？」

カナメ「それは別に構わねえよ」

雪蘭「準備が出来次第そちらに連絡する」

カナメ「ああ、じゃあな」

こうして、影の君主に加えランキング1位プレイヤーと言う協力なカードを手に入れたサンセットレーペンズ、そしてこの後エイスの愚かな行動によりその名をダーウインズゲーム全体に轟かせる事になる

誘拐と予知夢

雪蘭によるカナメ誘拐事件から数日後　とある港の倉庫前

カナメ「ここか」

レイン「ええ、情報通りならここのはずです」

リ्यूジ「今までこの人の情報が違った事あるか？」

レイン「……いえ、無いですね」

リ्यूジ「だろ？、つてことはここなんだよ、それより問題なのは」

ウー　ウー　ウー　ウー

リユージ「えらい数だな」

レイン「ゲーム外でも好き放題やってたみたいですし、むしろ今まで良く捕まりませんでしたね、遅いくらいですよ」

鳴り響くパトカーのサイレン

それを横目にチラツと見た後、匂は自分の隣の空いた座席に手をおき呟くように名前を呼ぶ

匂「……………スイ」

サンセットトレーペイズがこのような状況になった理由は二時間前に遡る、その日は皆クラン拠点に集まり今後について話すようにしていた、皆平日の昼だと言うのに集った、しかしスイはそう言う訳にはいかなかった、どんなに協力的なシギル使いでも元はただの小学生、学校があり、親がいる、スイの性格上学校をサボる事は出来ず、また夕方来ると言う事になった、エイスが狙っているからと影の兵士を護衛に付けようとした匂

だったが現れた時誰かに見られたら説明する自信が無いのと自分の身は自分で守れるからと断られ匂も本人の意思を尊重した

しかし、それが良くなかった、夕方になつてもスイは現れず変わりに届いたのはダーウィنزゲームのチャット機能による一枚の写真、そこにはエイスのジャージを着た男の横で左腕を火傷した様に皮膚を爛れさせ、右肩から先が無く無数の打撲痕を顔に受けたスイとその横で両手の指を斬り飛ばされたカナメの友達シノツカだった、写真を見たとなんに飛び出そうとしたカナメと匂だったがレイン、シユカ、リユージに何処にいるかも分からないのに助けに行くのは無謀だし奴らの思う壺だ、と説得され大人しく匂の兵士達を総動員し探させ今に至る

匂「……行くぞ」

リユージ「いや、行くつて前は警察で一杯だぞ、まさか突っ込め何て言わねえよな？」

匂「そんな必要はない、前が空いてないなら上から行けばいい」

リユージ「いや上って、ああ、あれか」

匂「ああ、スイの好きなあれだ」

スイ サイド

ただ運が悪かった

学校に行く時たまたまエイスマンバーに見つかり、たまたま他のエイスマンバーが来る方向に逃げてしまった、その結果がこれだ

大の大人ですらショック死してもおかしくない苦痛を耐え続けるスイ、しかし余りの苦痛にとうとう気絶してしまう

スイ（あれ？、私は……）

目の前に広がるのは砂漠、なにもなくただ砂が広がる砂漠のみ

スイ（そっか、私とうとう死んじやったんだ）

実際は気を失っただけだがスイは知ることには出来ない

砂漠を歩いていると前に人影が現れる幾つもの人影と少し離れたところに一人の人影が現れる、それは自分のよく知る人達ばかりだった

スイ（匂さん!!）

次第に複数人の方の人影も顔が現れ始める

スイ（カナメさん!!、皆も!!、それに私!?!）

カナメを先頭に次々現れるサンセットレーペンズのメンバーしかしなげか全員匂に武器を向けていた

カナメ「何でだよ、何でこんなことすんだよ!!、俺達仲間だったろ!!」

旬「ああ、でも俺はその仲間裏切られた」

カナメ「違う!!、あんたが俺達を視ようとしなかっただけだ!!、今もそうやって俺達から目を反らしてる!!」

旬「どちらにしろ、俺が自分の世界に帰るにはこれしかない」

カナメ「だったら俺達はあるあんたを止める!!、これ以上あんたに人殺しさせない!!」

旬「そうか、交渉決裂だ、出てこい」

号令と共に現れる影の兵士、瞬く間に白かった砂の大地は兵士達によつて黒く染め上げられる

スイ（一体何が起きてるの？）

スイはその光景を見ることしか出来ない何を見ているのかも分からない状況のなか
声をかけられる

??? 「これは未来、今最も起こりうる可能性の高い未来」

驚きスイが振り替えるとそこには恐らく男だろうと言う事以外一切分からない真つ
黒な騎士の様な人物が立っていた、スイは恐る恐る質問をする

スイ（あなたは？）

するとその人物は答える

??? 「私はアスボーン、初代影の君主だ」

クランバトル

スイ（アスボーンさん？）

アスボーン「左様、その彼、水篠旬の力の源と思えば良い」

スイ（あ、あのそれで、最も起こりうる可能性の未来って）

アスボーン「ああ、言葉の通りだ、今のままではこの未来が訪れる」

スイ（そんな!!、どうにかならないんですか!?!）

アスボーン「それは今のお前達の行動次第だ、そろそろ時間らしい」

スイ（え？）

アスブーン「私は元々既に消えた存在、存在できていること事態奇跡に等しい、では、我が後継者の友よ、お前達の未来が明るい事を祈っている」

そう言うとアスブーンが消え、スイの視界が白く染まる

スイ「ハッ」

目が覚め辺りを見渡すと無骨な天井と手に包帯を巻いた制服を着た男が泣いていた

スイ「ダイジヨウブデスカ？、アレ？」

男に話しかけた声は自分の物だったろうか？、そう疑わざるを得ないほどにかすれ普段の可愛らしい声は見る影も無かった、そして他人を心配出来る状態じゃないことを嫌でも思い出す事になる、男に近付こうと立ち上がるため手を付こうとして転んだ、そして嫌でも自分の状態を思い出し痛みの余り叫ぶ

スイ「あ、あああああああ!!!」

その様子を嘲笑う男達の集団、痛みへのたうち回りたくても、体が動かない、痛みが、悲しさが、悔しさが溢れ涙が零れる

スイ「助けて、誰か、助けて!!!」

スイの叫びに応えるように大きな破壊音が起こる、崩れたのは壁でもドアでも無く天井、壊れた天井を見上げるとそこには見覚えのある大きな黒い影とその上に乗る二人の小さな影

スイ「旬さん？、カナメさん？」

それはカイセルに乗った旬とカナメ、その目は怒り、そして憎悪に彩られ、旬の瞳孔は紫色に輝きカナメの目に光は無かった

旬&カナメ サイド

旬「ベル」

ベル「ハッ」

旬「2人を頼む」

カイセルから降りると同時にベルを呼びすぐさま2人の治療をさせる、しかし

ベル「王よ、此方の男の治療は出来ましたが、王の友の傷が深く私では治せません」

ベルの力を持ってしても治せない傷、つまりそれは現状誰にも治せないと言うことになる

彼を除けば

旬「そうかかった」

懐から薬瓶を取り出し蓋を外す、慎重に中の赤い液体をスイの口元に運び少しずつ飲ませる、最後の一滴を飲ませた時スイの傷が癒え、腕の焼け跡が消え、右腕がよみがえる、それはかつて彼の母を助ける時使った秘薬、あらゆる傷、病を治す奇跡の薬、命の神水

旬「ベル2人を頼む、守ってくれ」

ベル「畏まりました、王よ」

旬はベルに2人を任せるとエイスマンバーに相對するようにカナメの横に立つ

カナメ「準備は良いか？」

旬「ああ、始めてくれ」

カナメ「さっさと王（ワン）を呼ぶことをおすすすめするぜ、クランバトルだ、蹴り付けてやる」

それからの2人は圧倒的だった、様々な武器を造り、的確に敵を殺していくカナメ、圧倒的身体能力で敵を斬り伏せる旬、王(ワン)が来る頃には既に渋谷最大級のクラン、エイスは見る影も無かった

王(ワン)「てえらく!!!、殺す殺す殺す殺す!!!、てえらだけは、俺の手でころ」

その時王(ワン)の残りの四肢に痛みが走る、1つではない、何百何千、何万の痛みが襲う

王(ワン)「ぎゃあああああああああ!!!」

余りの痛みに叫びそして、思い出す、あの時自分が襲われた感覚、死を前にしたあの恐怖、確実な死を全身に浴びたあの時を、

王(ワン)「た、助けてくれ!!!頼む!!!この通りだ!!!、そ、そうだこうさ、むぐっ!!!」

降参、そう宣言しようとした時、口を誰かに覆われる感覚に襲われる、しかし誰も彼の口に手を置いていない、ただ匂が手を王（ワン）に向けているだけ、なにも知らない人間からすればそう見えるだろう、しかし実際は支配者の権能により王（ワン）の口を塞いでいる

匂「降参何て認めるわけ無いだろう、今まで好き勝手やってきたんだ、俺が甘かったよ、まさかあれだけやって、まだ歯向かってくるなんて、認識を改めなきゃな、いや、戻す、と言った方がいいか？、弱ければ踏みにじられる、久しく忘れていたよ、踏みにじられないよう強くなろうって思ったはずなんだけどな、まあお前には関係無いな、死ね」

その時背中に軽い衝撃を受けた

スイ サイド

目が覚めると目の前に黒い大きな蟻がいた、でも恐怖はない彼を知っているから

スイ「ベルさん、治してくれたんですね、ありがとうございます」

ベル「いや、お前を治したのは拙者ではない、我が王だ」

スイ「え？」

ベル「王に感謝しろ、お前を助けるために王は貴重な秘薬をお使いになった」

スイ「そうだったんですか、ありがとうございます、それで匂さんは」

ベル「王ならあそこだ」

ベルの指を追い、目を向けるとそこには、王（ワン）に止めをさそうとする匂とそれを見届けるカナメの姿、そしてそれを見てアスポーンの言葉が頭を過る

今のままではこの未来が訪れる

スイはいても立ってもいられず走りだし旬に抱きついた

旬「スイ？」

スイ「旬さん、それは駄目です、私は無事でした、旬さんのお陰です、でももうやめて下さい、このままじゃ旬さんが遠くに行っちゃやう気がします」

旬「……………」

旬はなにも言わず短剣を下ろしスイに向き直り頭を撫で回す

スイ「あう／＼／／」

そしてカナメは王（ワン）に向き直り銃を突き付ける、思い出した様に王（ワン）が降参を告げた

カナメ「さて王（ワン）さん、今回の件はあんたらの物全部で手を打ってやる」

王（ワン）「はあ？、なにいつてやがる、負けたぶんのポイント1800ポイントは受け取つただろ!!」

カナメ「あんたさ、ポーカーのルールにオールインつてあるの知ってるか？」

王（ワン）「はあ？ポーカー？、まさか」

カナメ「そのまさかさ、オールイン、お互いのチップを全部賭ける、勝者そう取りの一発勝負、勝者総取り（ハイローラー）、俺がイベントで貰った特権だ、今回動くポイント8878ポイント、結構溜め込んでたみたいだが、俺達の張った額より少ないな、残念、お前ら全員ポイント全損だ」

王（ワン）「終わり？、これで終わり？」

その時王（ワン）は見た、カナメの体を動く毒虫を、匂の体から溢れる死のオーラを

王（ワン）「よう、新しい王様、これからはあんたら大変だぜ、何せ王を引きずり下ろしたんだ、これからあんたらの周りには死体が積み重ねられるだろうよ、ギャハハハハハハハ!!!」

カナメは静かに引き金を引き、王（ワン）の姿が消え、人形アートを残すのみになった

これがサンセットレーペンズ初クランバトルだった

盲目の種との出会い

王（ワン）の死を見届けた匂とカナメ、そこに他のエイスマンバーを相手していたレイン、リユージ、シユカが合流する

レイン「終わりました？」

カナメ「ああ、終わった」

匂「……嫌、まだだ、ベル」

匂がベルを呼ぶとシノツカを抱えたベルが現れる

カナメ「シノツカ!!」

カナメが慌てて駆け寄りシノツカの無事を確認する、眠っているだけの様で、スー

スーと寝息を立てている

旬「彼はカナメ君の、何より俺達の事を知ってしまった、このままでは元の生活に戻れない」

レイン「まるで、何か手があるような言い方ですね」

旬「ああ、彼の記憶を書き換える、目が覚めれば今日一日カナメ君と遊び呆けていた記憶になるようにする」

レイン「もう貴方が何をしても驚きませんよ、さっさとやっってください、警察が来ちゃいます」

すると旬は右手の人差し指をシノツカの額に当てる、すると黒いモヤの様なものがシノツカの顔を覆いやがて霧散した

旬「これで良い」

カナメ「すまねえ匂さん、いつも助けてもらって」

匂「良いよ、仲間だろ」

匂はそう言うのと振り返り、スイの元に行く

スイ「匂さん」

匂「……すまなかつた、あの時無理やりにも君に護衛を付けさせておくべきだった」
頭を下げる匂に慌てて弁明するスイ

「あ、頭を上げてください!!、あれは私のわがままだったんですから!!、あ、あれ?」

目から涙が零れる、次々と溢れる涙に戸惑っていると匂が優しく抱きしめ最後に再び
謝った

旬「……………すまなかつた」

その言葉を聞き、スイは大声を上げて泣いた

スイ「う、うわああああああ!!!」

スイが泣き疲れ、眠つたのを確認した後旬がスイを背負い車に乗せその場を退散した

数日後 とある病院のとある病室

ナース「ヒイラギさん、ヒイラギスズネさん、お客様ですよ」

ナースに呼ばれ振り返る少女、しかしその目は包帯に覆われ視界を失っており聴力を頼りにする形だ

スズネ「は、はい、どなたですか？」

現れたのはスーツの男、その手にアタツシユケースを持ち胡散臭い笑顔を浮かべている

スーツの男「突然の来訪大変失礼いたします、私、カネヒラ保険組合を営んでおります、カネヒラヒデアキと申します」

スズネ「保険屋さん？、私未成年ですし、そう言う話は父に……」

そこまで言うとかネヒラが割って入る

カネヒラ「ああ、いえ、今回は営業に来たわけではありません、あなた様を受取人にした保険金、一億六千万のお支払に参りました」

スズネ「保険金？、一体誰の？」

カネヒラ「大変申し上げ難いのですが、あなた様のお父上であるヒイラギイチロウ様

の死亡保険金になります、この度は御愁傷様でした」

スズネ「は？」

スズネは困惑した、確かに最近父は見舞いに来ない、毎日欠かさず来ていた父がだ、最初はそう言う事もあるだろうと、思っていたが最近は何かあったのかと思い始めていた矢先にこの話だ、理解は出来ても受け入れることは出来なかった

スズネ「か、帰ってください!!!」

サンセットレーベンズ サイド

レイン「まあ、こうなりますよね」

カナメ「ああ、親父さんが死んだんだ、しかも自分の知らないところで、死に目にも会えず」

リユージ「死んだことを知るのが保険金の受け取りなんて、やるせねえよな」

シユカ「可哀想に、処でスイは？」

レイン「ああ、今は家で休んでるみたいです、さすがにあんなことされた後ですから」

カナメ「それが良い、あいつは遠慮しすぎるからな、もうちよつとソータみたいに碎けた感じになってくれれば良いんだが」

旬「だからって碎けすぎるのも困るがな」

カナメ「はは、確かに」

カネヒラ「では失礼します」

皆で話しているとカネヒラが出てきた

カネヒラ「残念ながら受け取りは拒否されてしまいました」

レイン「当然でしょう、生きていると信じている人の保険金何て」

カネヒラ「また後日改めるとしましょう」

そう言うときカネヒラは去っていった

入れ替わる様に匂が病室に入る

スズネ「誰？、また保険屋さん？父の保険金何てふざけたこと言わないで下さいね、父は生きてますから」

カネヒラのせいでかなり警戒されているらしい

匂「保険屋じゃない、俺は水篠匂、あんたの親父さんにあんたの治療を頼まれた」

それはクランメンバーが驚く発言だった、まさかベルを出す気なのかと、

旬「君が俺を信じるなら君の目を治そう」

その言葉にスズネは怒った、スイのプンプン何て可愛らしい物じゃない、怒気、殺意に似た怒気だ

スズネ「~~~~!!、どいつもこいつも、いい加減にしてよ!!!、お父さんが死んだ保険金の次はお父さんに頼まれて目を治しに来た?、ふざけないで!!!、帰って、帰ってよ!!!」

旬はしばらく立ったままだったが少女の気が変わらないのを確認する

旬「また来る、気が変わったら言ってくれ」

そう一言言い残し病室を後にした

レイン「あれは不味いのでは?、ああなつて当然ですよ、大体そんな約束貴方達して

なかつたでしょう」

旬が帰ろうとしている時レインが世のに付き話しかけてきた

旬「それが俺に出来る唯一の恩返しだから」

レイン「そうですか、でもそう言う所、旬さんらしくて私は好きです／＼／＼」

顔を真っ赤にさせながら言うレインに旬が気付く事は無かつた

盲目の種の選択

カネヒラと匂がスズネに面会した次の日

匂「無理して来なくても良かったんだぞ？」

レイン「そうですね、彼のおかげで我々は助かったとはいえ、貴方はほとんど面識ありませんし、何より傷が癒えたとはいえ、一日寝ただけじゃないですか」

スイ「いえ、一日寝れば十分ですよ、それに怪我が治ったのに何時までも寝てたら申し訳ないです、それに、年の近い人が多ければ話しやすいと思うんです、レインさんは近寄りやすい雰囲気ですから」

レイン「それを言ったら私の目の前で言いますか」

スイ「ああ、いえ、その、悪い意味じゃなくて、その、えっと」

それを見て匂が助け船を出す

匂「要はレインは高嶺の花って言いたいのさ」

レイン「……………そう言うことにはしておきましょう」

そうこうしているうちに目的の病室の前に着き匂が無造作にドアを開ける

レイン「ちよっ!!、もう少し丁寧に開けてください、ここ病院ですよ」

匂「壊れなかっただけマシだろう？」

レイン「そう言う所、私は嫌いです」

何故かむくれるように言うレインの頭に手を置き撫でくり回す匂

旬「分かった」

スズネの前に着くと彼女に声をかける

旬「やあ、調子はどうだい？」

スズネ「また貴方ですか？、帰って、この目は父が治してくれるの、必ず治療費を稼いで私の目を治してくれるって約束してくれたの」

旬「答えは変わらないか？」

スズネ「変わらないわ、だから帰って」

旬「……………また来る、行くぞ」

スイ「え、えっと、その」

レイン「良いから、行きますよ」

するとスズネから声をかけてきた

スズネ「？、今日は貴方だけじゃないの？」

旬「ああ、彼女達は俺の仲間だ」

レイン「初めまして、レインと申します」

スイ「初めまして、スイって言います」

スズネ「ふふ、初めまして、私は、」

彼女が名前を告げようとした時レインが言う

レイン「ヒイラギスズネさん、知ってますよ、お父様から色々聞いてますから」

実際は彼女の解析屋としての力で調べあげた情報なのだが、父から聞いた方と言った方が印象は良いだろうと判断しレインが気を利かせたのだ

スズネ「父から？、ふふ、父は私の事を何て？」

レイン「可愛らしい自慢の娘だと」

スズネ「父らしいわね、……………ねえ」

明るかったスズネの表情が徐々に暗くなり思い詰めた表情で声をかけてきた

スズネ「父は、父は本当に亡くなったの？」

レイン「……………それは」

レインが困っているとスズネが続ける

スズネ「お願い、本当の事を教えて？、貴方の言葉ならきつと、どんな言葉でも信じられる気がするの、何故か分からないけど」

その言葉を聞いたレインが覚悟を決めたように1つ息を付き続ける

レイン「ええ、貴方のお父様、ヒイラギイチロウさんは亡くなりました、それは彼、水篠旬さんが確認しています」

そう、実は旬はイベント終了後兵士を使い倒壊したビルの残骸からヒイラギイチロウの死体が無いか探したが、やはり残っているのはビルの残骸に残された人形アトだったと思われる不自然に切り取られたような壁や床の残骸しか無く、そのうちの1つにヒイラギイチロウの物と思われる植物に囲まれた人形アトがあった

スズネ「彼が？」

レイン「ええ」

スズネ「そう、父はもう、私の所には来てくれないのね」

レイン「……………」

スズネ「もう花を見て笑い合うことも無いのね」

スイ「……………」

スズネ「この目ね、昔は見えていたの、病気になる前、父は色々な所に連れて行ってくれたわ、海、山、花畑」

旬「……………」

スズネ「もう一度、もう一度この目で見てみたいわ」

その言葉にレインが答える

レイン「視れますよ、もう一度、彼の手を取れば」

スズネ「ええ、そうね」

旬は彼女の前に立ち再び質問した

旬「君の目は治せる、どうする？」

スズネ「1つだけ教えて？、父はどうして亡くなったの？」

レインとスイはどう言おうか迷ったが旬は迷うこと無く言い放つ

旬「彼はあるゲームに巻き込まれ殺された」

レイン&スイ「旬さん!!」

2人は旬の対応に抗議しようとしたがそれより早くスズネが続ける

スズネ「そう、そのゲーム私も参加出来る？」

レイン「なっ!!、何を!!!」

レインは信じられないと言うようにすぐさまやめるよう言おうとした、しかし

スズネ「私から父を奪ったそのゲーム、私は許せない、だから、お願い、私に力を貸して、この目を治して」

旬は、スズネのケータイにゲームのIDを送りベルを呼ぶ

旬「ベル」

ベル「はっ」

匂「彼女の目を治してくれ」

ベル「畏まりました」

ベルが彼女の目に手をかざし暫くして、彼女の目の包帯を取った

スズネ「視える、視えるわ!!、視える!!!」

久しく無かった視覚からの情報、世界の色に興奮するが視界に捉えた黒い蟻の姿に固まる

匂「ベル、ありがとう、もう戻って良いぞ」

ベル「はっ、また何かありましたらいつでもお呼び下さい」

ベルが影に戻り、スズネにゲームの詳細を説明しゲームを起動させる、するとスズネは首を蛇に噛まれる幻覚を見て驚く

旬「これで君は、ゲーム参加者だ」

レイン「これからは本当に命懸けですよ」

スズネ「覚悟の上よ、父の恨みを晴らすんだから、ところでこれからどうしたら良いの？」

旬「まずは退院の手続きの後俺達のクランに入るといい、とりあえず今日はゆっくり休むといい、また明日向かえに来る」

その後旬達が部屋を出た、その背後で笑う白衣の女に気づいたのはきつと旬だけだっただろう

発芽の時

旬達が帰った後の病室、消灯時間になり、ベットに横になるスズネ、突然目が見えるようになったことに病院全体が騒然とし、ずっと包帯をしていたのでとれた時には視えていた、と目茶苦茶苦しい言い訳をごり押しし、検査の結果でも目が見える様になったこと以外異常もなく健康だったので翌日の退院を勝ち取った

スズネ（明日は退院した後お父さんの仲間の人と話す事になってるし早いとこ寝た方が良いよね）

スズネがベットで横になり、布団を被り目を閉じた時ドアが空いた音がした、何事かと目を開きドアの方を見るとそこには自分の担当だったナースが立っていた

スズネ「看護師さん？、どうしたんですかこんな時間に？」

ナース「ああ、いえ、明日は会えそうに無かったので最後に挨拶をと思ひまして」

スズネ「そうですか、でもこんな時間に来るなんて感心しませんよ？」

ナース「そうですね本当はもっと早い時間に来るつもりだったんですが、**案外準備に時間がかかってしまつて**」

スズネ「準備？」

ナース「ええ、あなたを殺す準備をね」

スズネ「え？」

するとスズネのケータイにメッセージが入り思わずケータイに目を向けたするとそこには

マッチング完了 バトルスタート!!

と表示されていた、そこには自分に良く似たキャラクターの絵と目の前のナースに良く似たキャラクターがファイティングポーズをとっていた、慌ててナースの方を見ると左手の手のひらから何かを引き抜く様に右手を動かしているナースの姿、すると今まで何も無かった空間から一本の刀の様な物が出てきた

ナース「ふふ、すごいでしょ？、手品じゃないのよ？、これが私がこのゲームから与えられた力、あらゆる刃物を造り出す力なの、貴方はどんな力なのかしら？、最後に見せてくれる？何時もみたいに」

そう言うとナースはスズネに刀を振り下ろそうとする、スズネが咄嗟に枕を投げつけナースが枕を切る、中の羽毛が飛び散りそれに乗じてスズネはナースの横を走り抜けドアから出ていく

助けを求めるため人を探すが無故か病人すら居ない、誰か居ないか走っていると反対側から懐中電灯の明かりが見えた、その光に向かって叫ぶ

スズネ「た、助けてください!!」

それは自分の担当である主治医の女医者だった

医者「スズネちゃん？、どうしたのそんなに慌てて」

スズネ「助けて下さい!!、看護師さんが、わ、私の事殺そうと!!」

医者「落ち着いて？、何を言ってるの？」

するとそこに先程のナースが現れるそれも先程の刀をもう1つ増やし、2本の刀を持って、これで話を信じて貰えると思っていたスズネだが、その反応は予想と大きく異なっていた

ナース「あら先生、足止めありがとうございます」

医者「いえいえ、これくらいは、ヘルプコールを使われたらその分の働きはしますよ」

スズネ「……へ？」

医者「ごめんねスズネちゃん、私、彼女のパートナーなの」

すると医者は懐から注射器を取り出しその蓋を引いていく、すると針の方に薬瓶が無いにも関わらず注射器の中は液体で満たされた

医者「私の力はね、あらゆる成分を造り出すことが出来るの、当然毒なんかもね」

スズネは医者を突飛ばし運良く転んだ医者の横を走り抜けようとした、しかし咄嗟に医者が足を掴み転んでしまう

ナース「なかなかてこずらせてくれましたが、これでまた臨時収入ゲットですね」

医者「ちゃんと山分けしてくださいよ？」

ナース「分かっていますよ」

勝ちを確信したように今後の事を話す医者とナース、ナースが刀を振り下ろそうとする、余りの恐怖に目をつぶり死を覚悟する、しかし何時までも痛みが来ることはない、そつと目を開けるとそこには自分の周りをくるくる回る赤と青の球体が飛んでいた、そしてそれと同時に何故かこの球体の事、そして使い方が分かった

スズネ「~~~~!!」

スズネは青い球体に触れる、すると赤い球体が光だしナースに突撃する、途端にナースは炎に包まれ叫びになら無い断末魔をあげながら灰塵となった、しかしチャンスと視た医者が背後から奇襲を仕掛けようとしていた、スズネが築いたが赤い球体が戻ってくるより早く注射針が首に刺さり中身を注入されてしまう、すると全身の力が抜け体が崩れ落ちる

医者「ふゝ、そんな力を隠していたなんてね、少し焦ったわ、けど筋弛緩剤を打ったから暫く動けないわよ、その玉どつちかに触れてないと使えないんでしょう?」、すると再び注射器を引き抜き再び中身を満たす、今度は明らかに命を奪う液体、何故かそんな

予感がした、逃れるため体を動かそうとするがピクリとも動かない、恐怖の余り涙が零れる、すぐそこまで注射針が迫っている

医者「さよなら、スズネちゃんなかなか面白かったわ」

すると突如スズネの影が揺れ動き影から何かが飛び出す、驚いた医者が尻餅をつく
と、そこには、真つ黒な騎士が一人、全面兜を被り頭には羽がついている、マントを羽織り身の丈程ある剣を持っている

医者「くっ!!、誰!!、突然現れて何なのよ!!」

イグリット「我が名はイグリット、主よりこの者を守るよう会瀬使った一介の騎士だ」
すると突如後ろの壁が壊れ一台の車が壁を壊し現れ中から人が現れる

リ्यूジ「よお、お医者さんこんな時間に診察か?随分仕事熱心だな、残業代は弾んで貰えるのか?」

現れたのはかつて渋谷を占領していた最大規模のクランエイスをたった6人で壊滅させた最強の精鋭クラン

サンセットレーベンズ

第2回イベント告知そしてスタート!?

医者は焦っていた、目の前にいるのは渋谷最大規模のクランを壊滅させた最強の精鋭クラン、逃げ切れることは出来ず戦うなんて最早論外、スズネを人質にしようにも謎の黒い騎士に守られている

リユージ「おいおい、無視すんなよお医者さん?、無学な俺にも教えてくれよ、やっぱり医者って儲かるのか?」

医者「ええそうね、お陰さまで今月の給料は貰えなさそうだけど」

医者は嫌みを言いながら何とか突破口を探す

カナメ「リユージ、遊んでる暇はない、さっさとずらかるぞ」

リユージ「そう言うなよ大将、折角お医者さんとフリートークできる機会何だ、良い

だろ？」

医者（チャンス!!）

リユージがカナメの方に視線を動かしたのを確認し車が開けた穴から外に逃げる

リユージ「あ」

カナメ「おいおい、なにやってる」

リユージ「くそっ!!、おい待ちやがれ!!」

カナメ「言つとくがギリギリまで撃つんじやねえぞ」

カナメがリユージに指示すると返事すること無く銃を空に掲げた

2人がいなくなった空間、経たり込む少女とそれを守る騎士、そして壁をぶち破り現

れた車から1人の人間が降りてくる、その人物が降りてくると今まで少女を守るように立っていた騎士はその人物に頭を垂れる

旬 「ご苦労イグリット」

イグリット 「滅相もございません」

するとイグリットが旬の影に飲み込まれるで最初からいなかっただよように消える

旬 「これがこのゲームの戦いだ、何時襲われるか分からないし、何時も守ってやる事は出来ない、それでも来るか？」

スズネ 「は、はい!!、ついていきます!!!」

スズネの返答に満足したのか、少し微笑み彼女を車に乗せる、すると遠くの方で発砲音が響いたのが耳に届く

匂「カナメ君」

カナメ「ああ、どうやらリユージがやったようだ、急いで撤退しよう、爺さん、車だしてくれ、リユージを回収した後すぐにここを離れるぞ」

爺「畏まりました」

その後リユージと合流した一行は一先ずそれぞれの家に送り届けられ車内には運転手の爺、カナメ、匂のみとなった、その時カナメのスマホにメッセージが入る

イベント告知!!!

ハンティングゲームを開始するよ!!! いっぱい倒してポイントゲットしよう!!!

カナメ「くそつ、ふざけたゲームだぜ、宝探しの次はハンティングだあ?、ん?」

その時カナメはある疑問を抱く

カナメ「なあ爺さん、旬さん、今って何日の何時だ？」

すると旬が答える

旬「確か今は16日の11時59分だな」

カナメは青ざめ画面をスクロールする、するとそこには

イベント開始まで残り30秒!!!

と言う表記

カナメ「くそっ!!ゲームマスターの野郎!!!、今から始まるゲームの告知を今してきやがった!!!」

慌てて三人は車を止め、出来るだけの準備をする

爺「カナメ様、こちら緊急用のバックパックです、サバイバルキットと、わずかですが水と食料も入っています、武器の方は大丈夫ですね？」

カナメ「ああ、大丈夫だ、これだけでも助かる」

匂「俺からもベルと10人程兵士を貸す、カナメ君の言うことを聞くように言っておいたから使ってやってくれ」

カナメ「マジで助かる、ありがとう匂さん、正直言つてこれ以上頼もしい戦力はない」

爺「カナメ様最後に、ハンティングゲームとやらがどの様な物かは分かりませんが、狩りで重要なのは戦闘力ではございません、重要なのは観察力、五感を研ぎ澄ますのです」

カナメ「ああ、肝に命じておくよ」

爺「行つてらっしゃいませ、それから帰ってきたら私の事は土明とお呼びください」

カナメ「ああ、じゃあ行ってくる」

旬「気を付けるんだよ、ベル、彼を頼んだよ」

ベル「はっ、お任せください」

カナメの影の中からベルが返事をする。カナメの周りに青い枠が現れやがてカナメの姿が消えた。

カナメ サイド

カナメ「くそっ、どこだここ?」

ベル「分からんがどこかの島の様だな」

カナメ「うわっ!!、なんだ、ベルさんか、ビックリした」

ベル「兎に角移動した方がいいぞ、我々は平気だが貴様のその格好でこの辺りにいるのは危険だ」

カナメ「ああ、そうだな、」

ベルがカナメの影に戻るとカナメは森の中を歩きだし、やがてあるものを見つける

カナメ「おいおい、何でこんなもんが森の中にあるんだよ」

ベル「キエエ、何とも変わった岩だな」

カナメ「いや、変わってるなんて物じゃねえ、これは」

そこにあるのは渋谷の名物であり待ち合わせに使われる物の一つそしてダーウインズゲーム参加者から見てもとんでもないもの

カナメ「何でここに渋谷モアイ像があるんだよ!？」

狩られる狩人、狩る獲物

目の前の物を信じられぬと言う様に見えるカナメは口を開いた

カナメ「何でここに渋谷モアイ像があるんだよ」

ベル「そんなにおかしな事なのか？」

カナメ「ああ、あり得ねえ、これは、俺達の拠点である渋谷にあるもんだ、つまりここは渋谷つてことになる」

ベル「ふむ、あそこはこんなに鬱蒼とした森は無かったと思うが……何奴!!!」

ベルが言うとかナメの影を飛び出しカナメを守るように立つ

??? 「ひえ〜!!!、ご、ごめんなさい!!!、殺さないで!!!」

現れたのは若干小太りの青年迷彩柄のヘルメットを被り手に銃を持つ、背中には大きなバツクパツクを背負っている、カナメがベルの後ろで銃を作り構えながら尋問する

カナメ「何のようだ、ここで何をしている」

??? 「いや、俺は、その、」

しどろもどろな言い方にベルがキレる

ベル「キエエ!!、はつきり喋らんか!!!」

ベルの怒気に当てられ尻餅をつく

??? 「そ、その!!、誰かの背中が見えたので一緒に行動出来たらと思いましたが!!!」

その返答に呆れるベルとカナメ、ベルは若干警戒を解きカナメも構えを解く、カナメ

は暫く考えたが結局彼と行動を共にすることにした

カナメ「ああ、分かった、一緒に行動してやる、俺はカナメ、スドウ カナメだ」

???「あ、ありがとうございます!!、俺はオージって言いますってスドウ カナメ!!!、あのサンセットレーベンズの!」

突然大声を上げたオージに驚くカナメ

カナメ「な、なんだ?、俺の事知ってんのか?」

オージ「当然じゃないっすか!!、宝探しイベントをクリアした上渋谷で好き勝手やってたエイスを倒し一般プレイヤーに克蘭シエルターを解放したサンセットレーベンズのリーダー!!、俺もあれには助けられました!!、本当にありがとうございます!!!」

深々と頭を下げるオージ

カナメ「そ、そうか、まあほほお飾りリーダーだけだな」

オージ「何言ってるんすか!!、あの精鋭クランのリーダーつすよ!?!お飾りな訳無いつす!!」

カナメはオージの力説に苦笑いを浮かべる事しか出来ずその日は時間も遅かったこともあり2人は眠りに就きベルと影の兵士に警備を任せる事にした

次の日 サンセットレーベンズ サイド

リユージ「よお、戻ったぜ」

シユカ「お帰りく、どうだった？」

リユージ「ああ、まあほほ情報通りだ、トリニテイに潜って来たけど今回のハンティングイベントで相当稼いでるみたいだ、それでそっちはどうだ？」

シユカ「今レインと匂が見てる」

レイン&匂 サイド

レイン「なんと言うか、凄まじいの一言ですね」

匂「ああ、これは、凄いな」

スズネ「はあ、はあ、はあ、」

そこには息を切られているスズネの周りで赤と青の他に緑と黒の玉が回っていた

レイン「シギル名、元素の賢王（エレメント・デイズキング）、王級を当てるなんてかなり運が良いですね」

匂「ああ、破壊力もかなりの物だ、だが何で王何だ？、女の子何だから女王だろ？、しかもエレメント要素どこだ？」

レイン「私に聞かれても分かりませんよ、男でも王女だったシギル使いも居ますよ？、エレメントに関しては玉の色が四代元素色に似ているからでは？、黒なんて無かった筈ですけど」

旬「ふむ、そう言うもんなのか」

レイン「そう思っていた方がいいですね」

スズネ「あ、あの」

2人で話し込んでいるとスズネが話しかけてきた

旬「ん？」

スズネ「私の攻撃避けながら雑談するの止めてくださいい〜!!!、心が折れそうです〜!!!」

そう、先程から旬は無数に放たれる攻撃の中を掻い潜りレインと雑談しているのだ
た

旬「破壊力は申し分無いけど、欠点はスピードだな、後は破壊力特化だからって全部の玉を攻撃に回しちゃ駄目だ、近ずかれた時身を守る術がない、攻撃するなら短剣とかナイフの扱いを覚えるのと最悪1つは玉を自分の近くに置いておくといい」

スズネ「で、でもそれだと攻撃が弱くなりませんか？」

スズネのシギルは圧倒的破壊力と面攻撃に物を言わせた破壊特化、護衛に玉を1つは漂わせておくだけより全て攻撃に回した方が良くいとスズネは判断したのだった

旬「それは考え方次第だよ」

スズネ「え？」

旬「君はどうして緑と黒の玉なんて作れたんだい？」

スズネ「え？、えつと皆さんにあつた後赤と青の玉を見てたらシユカさんとスイちやんみたいだなと思つて、それで匂さんとレインさんの事を考えながらシギルを使つたら黒と緑が……あ」

匂は微笑むように笑つた

スズネ「カナメさんカナメさんカナメさんカナメさん」

ブツブツとカナメを呼ぶスズネにレインが若干引いているのをよそに現れたのは透明な玉、合わせて玉は全部で5つ

レイン「よ、良かったですね」

透明な玉で攻撃しようとする玉が形を変え、細長い槍のようになり目に見えない速度で飛んでいき壁に突き刺さつた

リユージ「おいおい何だ!?!、すげー音がしたぞ!!」

余りの轟音に外で待っていたシユカとスイ、リユージが入ってきた

旬「……これは使えるな」

レイン「でも私達の事をイメージして作られているにしては私達にあんまり関係した能力には見えませんね」

そう、玉にはそれぞれ能力が付いており赤は敵を灰塵にするまで焼き殺し、青は敵がくだけ散る、緑は何故か砂になり黒に至っては敵が消える、そして透明な玉は槍になり超スピードで動く、サンセットレーベンスのメンバーをイメージして作られた割には関連するのは無理やりこじつけられるスイ（ソータ）の氷がくだけ散るのに似ている事位だ

旬「見た目の第一印象とかか？」

レイン「その可能性もありますが、これもシギルの良くわからない所としておきましよう」

リユージ「ああ、話してるとこ悪いが今からトリニティに行く、悪いけど名一杯お酒落してくれ、お偉方の前に出るから流石に普段の格好じゃ入れないからな」

カナメ サイド

カナメ「だから、お前が役に立つなら良いって」

オージ「マジっすか!!、分かりました!!、俺が役に立つとこ見せますよ!!」

カナメとオージは話しながら森を進む昨夜オージがカナメに克蘭に入れてくれと頼みカナメは役に立つならと返事しておりオージはとても張り切っていた が

カナメ「なんじゃこりゃあ」

オージ「ひどいっすね」

そこには何かにネジ殺されたようなプレイヤーの死体、あるものは頭がなく、あるものは下半身が無い何か大きな物に殺されたようだ、するとベルがカナメの影から飛び出し咆哮を上げる

ベル「キエエエエエエエエエ!!」

カナメとオージは何事かと警戒する、するとそこに現れたのは熊のような物の死体を食べるゴリラのように毛むくじやらかな体と対格を持つ一つ目の化け物だった

オージ「か、カナメさん!？」

カナメ「ああ、さしずめこいつが例の高得点の獲物でこの惨状の原因だろうな!!」

それを木の影から見守る謎の人物に気づく者はこの場にはいなかった

ベルVSドウメそして潜入

ベルの咆哮と共に現れた謎の生物、熊の死骸を片手にこちらをじっと見ている

カナメ「なんだこいつ、どっから現れやがった!？」

オージ「こいつはヤバい!!、俺でも分かるヤバいつすよ!!」

その時威嚇するようにその生物が叫ぶ

??? 「グワアアアアア!!」

カナメが対策を考えていると次の瞬間ベルの姿が消えそして同じ場所に再び現れた、何が起きたのか分からなかったがその手には先程の生物の頭が握られていた

ベル「ふん!!、小わっぱが、貴様程度、主の軍ではしたっぱも良いところだ」

ベルはその頭に向かつて言い放ちその頭を自身の後ろの木目掛けて投げつける

ベル「貴様もだ、先程からこそこそと何か用があるならさっさと降りてこい」

ベルの投げた頭を避けるようにその影が木から飛び降り姿を現す

??? 「よもやまさかバレていようとは、すまない俺の名はリク、侍だ」

その言葉にベルが反応する

ベル「侍？、侍だと？、貴様のような者が侍な訳あるか!!、時代劇を見て侍の何足るかを学び、侍を学んだ拙者を前に良くそんなことが言えたな!!」

カナメとオージはえええ……と言ったような顔でベルを見ておりリクと名乗った青年はポカンとしており、はつとすると一ツ咳払いをし話を続けた

リク「す、すまない、だがこれは俺の村での役職だからな、勝手に名乗り変える事は出来ないんだ」

ベル「ふん!!、それで何のようだ」

リク「ああ、あなたがあのドウメを倒している所を見てな、ドウメが現れた時は加勢した方がいいかと様子を見ていたが、そんな必要無かったな」

ベル「当たり前だ、あんなもの敵にもならん」

リク「そ、そうか、良かったら俺の村に来ないか?、歓迎しよう」

カナメとオージは村?、と首をかしげつつリクに着いていく事にした、ベルは一旦カナメの影に潜り村まで待機することになった

サンセットレーベンズ サイド

旬「……………」

リユージ「どうした？」

眉間を皺目天を仰いでる旬にリユージが心配し話しかけた

旬「いや、どっかの蟻が時代劇について熱く語ってる気がした」

リユージ「なんじゃそりゃ」

スイ「きつとベルさんですね!!」

元気に言うスイに首をかしげながらリユージが聞く

リユージ「何であいつなんだよ、他にも蟻はいるんだろ？」

レインがあきれ顔で言う

レイン「いや他にいないでしょ、あんな独特な喋りの蟻」

スイ「いつも拙者とか某とか言ってますもんね!!」

各々の反応に羞恥を覚え今度こそ時代劇を禁止しようと心に誓う旬だった

シユカ「ちよつと、スイもレインもこつち来てこの子の着替え手伝ってよ」

スズネ「あ、あの、これちよつと胸元が／／／／／」

レイン&スイ「は〜い」

30分後 トリニティアジト入り口前 トリニティサイド

黒服「て、テミス様!!」

テミス「何？、お客様がいるのに騒々しい」

黒服「そ、それが、また連中が店に」

テミス「？、ああ、またサンセットレーベンズの二人が来たの？、まあ適当に遊んでいつて貰いなさいな、お金落としてくれるならウエルカムウエルカム」

黒服「い、いえ、それが」

テミス「何よ？」

黒服「ぜ、全員です、サンセットレーベンズ全員で乗り込んで来ました!!」

テミス「はああ
!!!?」

同時刻同所 サンセットレーベンズ サイド

シユカ「ふくん、一応お店の雰囲気は合格点かにや〜」

レイン「シユカさん、一応敵地何ですから余り油断しないで下さいよ」

シユカ「大丈夫大丈夫、こんな大勢の前で襲いに来るほど奴らもバカじゃないでしょ、それに襲われても旬の兵士が守ってくれるでしょ」

士明「ホツホツホ、全くです、それに私もおりますので大丈夫ですよ」

雪蘭「皆何を殺気立っておる、今日は楽しむために来たのであろう？、儂はこう見えて賭け事が好きでの」

スズネ「いや、それよりこの格好を、どうにか／＼／」

スイ「で、でも緊張しますよお、私こんな格好したこと無いですし、周りは大人ばかりだし」

リユージ「あんま固くなるなよスイ、スズネ、今日はずちの大將の応援だ、荒事はたぶんねえよ、てかあつたらタダじやすなまいのは多分向こうだけだ」

リユージが旬の方をチラツと見ると旬は薄く笑う、その様子に周りの大人達はざわざわとする、やれあれがエイスを壊滅させたクランか、あのランキング1位の雪蘭だ、ただか中でも一番注目を集めたのはやはり旬だった

客1「あれがサンセットレーベンズの水篠旬か」

客2「ああ、彼1人で何千もの戦力に匹敵するらしい」

客3「何でも黒い騎士を呼ぶんだろ？」

客4「しかもその騎士も相当強いらしいぞ」

スイ「ヒエエ、な、何か私達も注目されてますけど、旬さん一番注目されてますね」

「シユカ「まあ、渋谷でさんざん暴れてるけど渋谷から出るのは久しぶりだしね、珍しいでしょ」

すると前から1人の女性が歩いてくる

「テミス「ようこそクラブトリニティへ、サンセットレーベンズの皆様」

シユカ「随分ぶりねテミス、なかなか良い店じゃない？」

シユカ「今日はよろしくね?、賭け事は得意じゃないからもしかしたら最後の来店かも知れないけど」

「テミス「あらそんな、可愛らしいのにとってもお強いと聞いてますのに、まあ人の噂は当てにならないものね?、まあ噂通りの人も要るみたいだけど」

「テミスは匂の事をチラッと見るが匂は無視する

旬「……………」

シユカ「賭け事も良いけど、今回はうちのカナメの応援に来たの」

テミス「それじゃあ特等席をご用意しなきゃね？」

スズネ「何でしょう、笑顔で挨拶してるだけなのに殺気が」

リ्यूジ「あれは翻訳すると……………」

旬「しなくて良い、さっさと行くぞ」

旬は悠々と2人の間に入り表向きは仲良く話してるテミスとシユカに話しかける

旬「テミスさん、そろそろ注目を集め始めたのでそろそろよろしいですか？」

テミス「あ、あらそうね、ではこちらにどうぞ」

その時周りから歓声が沸き起こった

謎の保険屋カネヒラ

カナメ サイド

カナメ「本当にこんなところに村なんてあるのか？」

オージ「はあ、はあ、ちよ、ちよつと待ってよ2人共!!」

カナメ「何だよもうバテたのかオージ？、走り込みが足りないな、折角の装備が泣くぞ」

リク「村までまだ少しある、この辺りで休憩すると良い、俺は一度村に戻って事情を説明してくる」

リクが先に行きカナメとオージ二人だけになる

カナメ「しかしお前良くそんな重装備持ってこれたな、俺なんて着の身着のままになるよ」

オージ「俺はいつも準備してるからね、イベント一時間前の告知だったから焦ったよ」

カナメ「一時間前!?!」

カナメ（くっそ!!、ゲームマスターの野郎残り1分で告知したの俺だけかよ!!）

ベル「あの翁と主に感謝するんだな」

ベルが影から声をかけてくる

カナメ「ああ、本当にそうだな」

その時後ろからがさがさと音がした

カナメ「誰だ!？」

カナメが武器を作り構えオーゾもそつちに注意を向ける

現れたのは

カネヒラ「これはこれは、ご無沙汰しております、カナメ様」

カナメ「あんた確かカネヒラとか言ったな、保険屋の」

カネヒラ「覚えていて頂いたようでありがとうございます」

カナメ「それで？俺に何のようだ？、ライバルは早いとこ排除しようつてか？虎の威を借る狐のようで申し訳無いが多分やられるのはあんた達だけだぜ？」

するとカナメの影からベルが飛び出し咆哮をあげる

ベル「キエエエエエエエエエエ!!!」

サンセットレーベンズ サイド

レイン「何と言うか画面で見ても威圧感凄いですね」

スズネ「あ、あの、あれって私の目を治してくれた」

スイ「はい、ベルさんです、とっても強いんですよ」

シユカ「見てみて、カネヒラの取り巻き達驚いて腰抜かしてる、間抜けだにや〜」

リユージ「おいおい良いのか？、あいつつてあんたの隠し球だろ？」

旬「……………ふつ、良いよ別に」

テミス「……………」

テミスは画面の向こうで咆哮をあげるベルを見て唾然としており客は熱狂していた、優勝候補2名の戦いが見れるだけでなく旬の力の一端でも見れるかも知れないからだ

シユカ「あ、カネヒラが引いた」

レイン「さすがに今カナメさんに手を出すのは得策じゃありませんからね、ベルさんもありますし下手に戦いになればベルさんに瞬殺されますからね」

旬「まあ、今回はカナメ君だけだからね俺達は見守ろう」

レイン「ところでテミスさん」

テミス「何かしら？」

レイン「テミスさんでも今回の島の場所は分からないんですか？」

テミス「残念ながらね、これだけのイベントだからもつと盛り上げたかったんだけど」
真実

リユージはシギルを使いテミスの言葉に嘘がないか調べていた、しかしテミスが間違った情報を信じ込んでいた場合は真実とでてしまい、本当の事を知ること出来ないそのためレインに会話を誘導して貰う計画だった

レイン「でもお店が盛況なようで安心しました、私達のせいで影響が出ていると噂でしたから」

テミス「あらいやな噂ね、でもお陰さまで毎日盛況よ」嘘

レイン「それは良かった、私達としても別にトリニティと敵対したいわけでは無いですしたまにこういった場所で息抜きしたいと思ってたんですよ」

シユカ「あー!!!」

その時突如シユカが大声をあげ、同時に旬が立ち上がった

レイン「ちよつとシユカさん、旬さん何ですか急に」

シユカ「ほらほら、カナメが写ったよ!!!」

旬「……いた、けどまだだな」

旬はその一言のみを残した座りシユカは騒いでいた

テミス「あら、良かったわね皆様のリーダーがまだお元気で、それでは私はそろそろ、皆様ごゆつくりどうぞ」

リユージ（おい、旬、シユカ、なんて事しやがる!!、作戦が台無しじゃねえか!!!）

シユカ「ねえ、テミス賭けをしない？、トリニテイのやつてるつまらない賭けレースじゃなくて、私と貴女の一对一で」

テミス「一対一？、私と貴女で？」

リユージ（ちよつと待て!!、そんなの予定に無いぞ!!）

テミス「随分唐突ね、でもレースじゃないなら何に賭けると言うの？」

シユカ「うーん、そうね、カナメがイベントを1位クリアするかどうか、そんなのはどう？、もちろん私は1位に賭けるは」

テミス「なるほど面白い提案ね、でもそれは少し自信過剰じゃなくて？、確かに彼は強豪プレイヤーだけど今回の本命って訳じゃない、今回はカネヒラとくちなわ会のセイゲンさんというイベントクリア経験のあるAランカーが2人もいるわ、そして彼らは現地で強力なチームを作り上げ率いている、対する彼はあの頼りない少年1人だけ、勝負にならなくない？」

シユカ「ふふ、ねえ、テミス忘れたの？そんなカナメにカネヒラは何故か背を向けた、

どうして？」

その時テミスは、はつとした

テミス「あの蟻？、あれが彼の切り札だと？、でもね、どんなに圧倒的な個がいても所詮軍には勝てないのよ？」

そこで旬がクスツと笑い話しに割ってはいる

旬「あいつは確かにあそこにいるなかで一番強いけど別に個って訳じゃない」

テミス「え？」

その時テミスの背後から歓声が上がると、モニターを見ると謎の生物に囲まれるカナメとオージ、そしてベルするとベルが再び咆哮をあげるとカナメの影が広がり中から10体程の黒いモンスターが現れる

その光景にテミスは唾然とする

シユカ「ねえ、どうするテミス、この賭け乗る？それとも反る？」

テミスは考えた

テミス（落ち着くのを、いくら強くたつて所詮は10体、それにこれは、狩りのゲーム、より多い方が有利に決まってるわ）

「テミス」でも、大体何を賭けるの？それだけ大きく出たからには、ポイントつて訳じゃないでしょ？」

シユカ「うーん、負けたら相手の傘下に入るってのはどうかにや？」

句を除くサンセットレーベンズメンバー「はあ!？」

リユージはシギルを使いシユカの考えを読もうとするが全て真実とでてしまい、カナ

メの事を心から信じていると思いい知らされるだけだった、すると旬がカナメの写るモニターを指差し話す

旬「もしあんたが勝てばあいつらあんたに使わせてやるよ、1年でどうだ？」

さらに美味しい餌をぶら下げられテミスは更に驚く、これは単純に1年間旬の戦力が減るだけでなく、その分トリニティの戦力が増えることを意味する

テミス「良いわ、その賭けのつてあげる、但し賭け自体を公表させて貰うわよ？、負けた後無かったことにされたらたまらないから」

シユカ「ええ、良いわよご自由に」

こうしてサンセットレーベンズとトリニティの存続を賭けた命がけのギャンブルが始まった

影の兵士の実力

カナメ サイド

カナメ「おいおいおいおい」

オージ「や、ヤバイっす!!、ヤバイっすよ!!」

ベル「ふむ、少々数が多いな」

カナメ「いやいや、これ少々どころじゃねえよ、1000近くいないか、これ」

カナメはベルの言葉に苦笑いを浮かべながら辺りを見回す、そこにはリクがドウメと呼ぶゴリラの様な毛むくじやらの生物、それが見渡す限り大量に要るのだ

ベル「ふむ、これは拙者1人では面倒だな」

カナメ「やっぱベルさんでもこの数は無理？」

ベル「バカを言うな、この程度の相手1匹も100匹も変わらんは、しかし今はお主らがおる我1人好き勝手動くわけには行くまい」

カナメ「じゃあどうする？、このままにらみ合いか？」

ベル「ふつ、なに、他の奴を呼べばよい、ちようどうつてつけの奴を王は送って下さった」

カナメ「は？」

ベル「キエエエエエエエエエエ!!」

ベルが叫ぶとカナメの影が広がり中から10体のモンスターが現れる、その姿は人形で顔が潰れ身体に入れ墨を入れていた

ベル「こいつらはハイオーク、かつて王の妹君を守護しておった奴らだ」

カナメ「へ、へえ、それより俺が気になるのは何であいつだけ格好が違うのかかな？」

カナメが指差したのはまるでまるで魔法使いの様な格好のハイオーク、手に赤い玉を持ちボロボロのローブの様な物を纏っている

??? 「お初にお目にかかる、王の友よ、私の名はキバ、ハイオークの魔術師だ」

カナメ「へ、へえ、ハイオークの魔術師ね、もう何でもありだな、あの人の兵士」

ベル「早速だがキバよ、拙者が奴らを薙ぎ払っている間ハイオークの戦士と共に彼らを守って欲しい」

キバ「お任せを」

そこから先はあつという間だった、ベルは姿が消える程のスピードで動き回り次々ドウメの首を刈り取る、ならばとカナメ達に標的を変え襲いかかるもドウメの攻撃はキバの張った障壁に阻まれその隙にハイオークの戦士がその首を自前の鉋や槍で叩き斬っていたものの10分程でドウメは全滅し、残ったのは血を全身に浴びたベルとハイオークの戦士、キバ、そしてカナメとオージだけであつた

カナメ「はは、こりや笑うしかないな」

オージ「カナメさん、俺、夢でも見てるんすかね」

カナメ「いや、現実だよ、て言うか俺達のクランに入りたいなら今のうちに慣れとけよ?、こんなのまだ序の口だぞ?」

オージ「え!?これで序の口!?!、流石に冗談つすよね?」

するとカナメはオージから目を逸らした

オージ「え？、ちよつと、何で目を逸らすんすか？、ねえカナメさん、何か言つてく
ださいよ!!、ねえ!!、カナメさんつてば!!」

烏達の傍観

サンセットレーベンズ サイド

テミスとシユカが観客全員の前で賭けの内容と賭ける物を宣言した後、テミスは啞然と映し出されたモニターを見ていた

テミス「……………」

レイン「最早かける言葉が見つかりません」

リユージ「しょうがねえだろ、あんなもの見せられちや」

そこにはカナメ達を守るキバとハイオークの戦士、そして次々ドウメの首を飛ばすべ
ルの姿とその横で加算され続けるカナメの獲得ポイントがあつた

「テミス」は、反則よあんなの!!、彼何もしてないじゃない!!、ただあのブサイクに守られてるだけで全部あの蟻が倒してるじゃない!!、反則!!、反則よ!!」

わめきたてるテミスにレインが冷静に反論する

レイン「ですが得点は加算され続けてます、あの得点板はトリニティ独自の物ではなくゲーム側が操作しているものを映し出しただけの物なのでしよう?、なら少なくともゲームマスターは問題ないと判断したと言うことでしょう、なにも問題ないはずです」

ぐうの音も出ない反論にワナワナとしている事しか出来ないテミスにシユカが追い討ちをかける

シユカ「きやはは、テミスってばダサクイ、大体吠えただけでAランカーが逃げたつてことはそれだけの強さってこと何だからあれくらい出きるでしょ?、それを見た上で賭けに乗ってきたんだから、テミス余程自信があるのね、カナメが1位にならない自信が」

ランキングに目をやるとカナメが1位と表示され2位のプレイヤーとかなりのポイント差をつけていた

スズネ「でも、これで1位は確實そうですね」

スイ「はい!!、すごい差が開いてますしね!!」

子供2人で話してる所に匂が割って入る

匂「嫌、まだ分からないよ」

その言葉にサンセットレーベンズのメンバーは顔をしかめテミスは若干目を輝かせた

リユージ「おいおい、まさかあの点差をひっくり返せる方法でもあんのか?」

シユカ「ちよつと匂、どう言うことよ、普通に見ればカナメが断トツで優勝でしょ!」

旬「まだ、1つだけ方法がある」

テミス「その方法って!？」

テミスが食い入るように聞いてくる

旬はモニター横の獲物1匹辺りのポイントが書いてある得点表を指差した、それを見て理解したようでレインが口を開く

レイン「なるほど、確かにその方法なら勝てなくは無いですが、どっちみち不可能じゃないですか?、それ」

旬「でも彼らにはシギルがある、それこそ王(ワン)の様なシギルなら理論上可能だ」

レイン「確かにそうですが、わざわざやろうとする人居ます?」

旬「さあ、分からない」

その様子を見ていた他の面々はしびれを斬らし話しに入る

リユージ「おいおい、2人だけで分かった雰囲気出すな、分からない奴らを置いてく
な」

シユカ「そうよ!!、速くカナメが負けちゃう方法教えなさいよ!!」

スイ「あ、あのすいません、分からないです」

スズネ「私も全然分かんない」

そこで旬は1から説明した

旬「今カナメ君はドウメを倒して約2000点獲得している、1匹辺り100点、だがボスは50000点、これは十中八九ドウメの親玉だ、1匹で50000点、普通の

奴500匹分、じゃあ問題、ボスを倒しても追いつけない程あの島にドウメがいるかな？」

そこで全員はつとした、つまりカナメに勝つ方法、それはボスを倒すことなのだ

レイン「だからどっちみち不可能ですよ、そもそもカナメさんが、無事なのは皆さんがいるから、他のプレイヤーはそんなのいるわけありません、そんな状態で普通のドウメにも勝てないのにボスを倒すことなんてほぼ不可能ですよ」

成る程とサンセットレーベンズメンバーが頷く隣でテミスが再びうなだれた

匂「まあ、今のは確実な方法ってだけなんだけど」

レイン「?、確実じゃない方法があるんですか?」

匂「まあ」

レイン 「それは？」

レインの問いに少し息を吸い話す

旬 「それは

人を殺すこと」

狩りの対象

サンセットレーベンズ サイド

レイン「人を殺す？、ですがプレイヤーを殺した所で得点の1000とプレイヤー殺しのペナルティでマイナス1000の計0で何のメリットにもなりませんよ？、ポイントを奪える訳でも無いですし」

旬「ああ、でもわざわざ人が得点として書いてあるんだ、居るはずだ、プレイヤーじゃない人間が、それも大勢」

旬の言葉サンセットレーベンズのメンバーは驚く

リユージ「おいおい、まさか一般人が紛れてるなんて言わないよな」

スイ「あ、あの、そんなことって」

スズネ「つくづくふざけたゲームね」

シユカ「前から分かってたけど、本当頭おかしいわ、このゲーム」

レイン「ですが、プレイヤーだって人です、流石にそんなことは」

旬「レイン、人は窮地に立つと何でもする、それこそあんな環境にいきなり放り込まれて狩りをしろなんて言われてその対象に人間がいれば自然と思うんだ、今だけは人を殺しても良いんだと」

その言葉が真実であることを証明するように切り替わる画面と共に何人かのプレイヤーの得点が急激に増えていく

そこには炎を上げる村の様な家々と逃げ惑う人々そして下衆な笑みを浮かべながら銃を撃ち続ける何人かのプレイヤーがいた、その姿をサンセットレーベンズのメンバーはただだ見ることしか出来なかつた、彼が映るまでは

シユカ「あ、カナメだ!!」

気がつけばシユカが指差した人物を全員見つめていた

カナメ サイド

カナメ「何だよ、これ」

ドウメ達の襲撃後、リクがなかなか戻ってこない事を心配し動き出したカナメ達、影の兵士を使い、リクの言う村を見つけ、到着すると、そこは一面炎と血だらけの地獄と化していた

プレイヤー1「おい!!、逃がすな、折角見つけたポイントだ!!、全部狩り尽くせ!!」

プレイヤー2「おい!!そいつは俺の獲物だ!!、ふざけんな!!」

そこにはまるで遊んでいるような様子で人間を殺すプレイヤー達がいた

カナメ「おい、何だよ、遂におかしくなったのか？、人殺しだぞ？、何で笑っている？」

オージ「カナメさん!!、ど、どうしたら!?!」

カナメ「くそっ!!、兎に角今はあの人達を助ける!!、ベルさん、悪いけど怪我人頼む!!、俺はプレイヤーを何とかする」

ベル「構わんが、本当に良いのか？」

カナメ「あ？、何がだ？」

ベル「あれは恐らくさっきのカネヒラとか言う奴の手先だ、敵対すれば面倒な事になるのだろう？」

カナメ「んなこと言つてられるか!!、頼んだぞ!!」

ベル「承知した」

ベルがどこかに飛んでいくのを確認するとカナメは武器を造り走り出し、次々とプレイヤーを制圧していく、するとそこに不意を伐つ形でカネヒラが刀を振り下ろす、カナメがいち早く気付き刀を造り罅迫り合いの形で止まる

カナメ「やあ、カネヒラさん、営業するには随分と田舎過ぎやしないかい?、もつと都会の人が多いい所に行かないと」

カネヒラ「ふふ、お気遣いありがとうございます、ですが都会だと我々少々形見が狭い思いをしておりますのでこれくらいがちょうど良いんですよ」

お互いの刀が弾かれ二人は大きく下がる

カナメ「そうかい、ならさつきと立ち去りな、ここにあなたの求めてるものはない」

カネヒラ「ふふ、それは魅力的な提案ですね、ですが今はあの蟻はいないようだ、その提案よりあなたを倒す方が我々にとっても得が多そうです」

カナメ「ああ、そうかい、やれるものならやってみやがれ!!」

カネヒラの実力

カナメとカネヒラは互いに刀を構えお互い様子を伺っていた

カナメ「あんたこんなこととして、何したいんだ？、やっぱイベントの特権目当てか？」
カネヒラ「そんなことはありませんよ？、私はただお金が欲しいだけです」

カナメ「へっ、分かりやすい嘘ありがとな、あんたが信用できない奴つてのは知ってたが嘘が下手なのは知らなかったぜ!!」

カナメは刀を投げつけマシンガンを造り構える、カネヒラは投げられた刀を弾き銃の軌道避けるように近付いてくる、カナメは堪らず閃光手榴弾を造りカネヒラに投げつけ距離を置く

カナメ「あんた本当に保険屋か？、明らかに戦い慣れてるだろ」

カネヒラ「ふふ、保険屋とは意外と敵が多い職でして、護身の術を身に付けるのは必須なのですよ」

カナメ「へえそいつは知らなかったな、俺には無理そうだ」

カネヒラ「ふふ、ご冗談を、貴方もなかなかお強いですよ、さて、ではそろそろ本気で参りましょう」

カナメは身構え何が起きるか警戒したすると突然カネヒラの姿が4人になりそれぞれ違う動きをとり始めた

カナメ「おいおい冗談だろ？」

カネヒラ「ふふ、貴方は手数多彩さが売りの様ですが、私は手数の多さが自慢でしてね？、これがなかなか便利何ですよ、仕事でも同じ時間に4件までは同時にお伺い出来ますし」

カナメ「自分が4人か、そいつは羨ましいな」

カネヒラ「「」では、そろそろ終わりに致しましょうか「」」

カネヒラが走り出しカナメに迫る

カナメ「へっ、ベルさんが居なくて焦ったなカネヒラさん、保険屋何だから色々保険をかけたくべきだったんじゃないか!？」

するとカナメの影が広がり中から4体のハイオークの戦士が現れる

カネヒラ「「」なっ!!!」

ハイオークの戦士が攻撃すると3人のカネヒラが斬られた後消え1人は刀で上手く攻撃を受け流していた

カネヒラ「まさか、こんな隠し球があったとは」

カナメ「へっ、あんたが言ったんだ、俺の取り柄は技の多彩さだってな」

カネヒラ「成る程、確かにこれは多彩だ、仕方ありません、ここは一旦引くとしましよう」

ベル「させると思うか？」

そこにカナメの指示により村人達を助けていたベルが戻ってくる

カナメ「ベルさん」

カネヒラ「これはこれは、絶体絶命と言った所でしようか」

ベル「安心しろ助けられるだけ助けた、あのリクとか言う奴も無事だ」

カナメ「そうか、ありがとなベルさん」

ベル「ふん、それで、こいつはどうする」

カナメ「ああ、とりあえず拘束してリク達に引き渡そう」

すると突然、地鳴りのような音が響き地震の様な揺れが起こる

カナメ「何だ!？」

ドウメ「**グオオオオオオオオオオ!!**」

現れたのは20匹程のドウメ、それがカナメとカネヒラ目掛けて迫ってくる

カナメ「くそっ!!、こんな時に」

ベル「**キエエエエエエエエエエ!!**」

カネヒラ「ふむ、私はお邪魔の様ですね、ではお先に失礼します」

カナメ「なっ!!、待ちやがれ!!」

カナメとベルが臨戦体制に入ったのを確認し、カネヒラが逃げる、ベルの速度なら追いつけなくはないがカナメをほっぽり出しては旬から受けた命令に反するためその場に留まる、五分程で片付きカナメはリクの居る所へと向かう

カナメ「リク!!」

リク「カナメ!!、無事だったのか!!」

カナメ「ああ、でもこれは」

そこには助からなかったであろう人達の亡骸が寝かされていた、中にはまだ幼い子供や老人の者まである

カナメ「早くこのイベントを終わらせないと」

リク「いべんと？、いべんととは何だ？」

カナメ「ああ、簡単に言や、祭りだ、俺達はこの戦いに駆り出された、本人の意思関係無くな」

リク「それは酷いな、それで？、そのいべんととやらはどうやったら終わる」

カナメ「ああ、多分ドウメのボスを倒せば終わる、そうすればもう人間に狙われることはない」

リク「そうか、ならば巫女様の所に行こう、あの方は未来を見通す不思議な力を持つ、あの方なら神殿に居るはずだ」

カナメ「分かった案内してくれ」

巫女

リクに案内されカナメ達がたどり着いたのは神社の鳥居の前、そこに二人の巫女服を着た少女が現れる

??? 「ようこそおいでくださいました、モクレンと申します、兄様、案内ありがとうございます」

オージ 「に、兄様!？」

モクレン 「はい、兄がお世話になりました」

するとモクレンはカナメの前でしゃがみこみ地面を見ながら言う

モクレン 「貴方もありがとうございます、兄の怪我を治してくれて」

カナメ「なっ!!」

するとカナメの影からベルが飛び出し姿を表す

ベル「ふむ、拙者が見えておったか」

モクレン「いえ、貴方がこの方の影から飛び出すのをよく見ていたので今回もそちらにいらっしやるかと」

カナメ「よく見てた？」

モクレン「ええ、この方の主は貴方では無いのでしょう？」

カナメ「よく分かったな、そうだ、今は借りてる途中って所かな」

するとモクレンの後ろにいた少女がおずおずとモクレンに話しかける

??? 「モクレン様」

モクレン 「ああ、失礼しました、この子は私の付き人で巫女見習いのトワです」

トワ 「ト、トワです」

カナメ 「ご丁寧にも、俺達は」

モクレン 「存じております、カナメ様、オージ様、ベル様、遠い異国より神に遣わされた方々よ、どうか我らの国、日本国をお救い下さい」

カナメ 「は？」

オージ 「へ？」

ベル 「ふむ、説明を願おうか？」

モクレン「失礼しました、では神殿に部屋をご用意してます、どうぞこちらへ」

リク「モクレン、俺は一度長老達に今回の件の報告に行く」

モクレン「分かりました、お気をつけて」

神殿内に案内されたカナメ達はお茶菓子を出され待っていた

オージ「……………」

カナメ「オージ、お前何固くなってるんだ？」

オージ「いや、何か、あの子がずっと睨んでる気がする」

するとカナメはトワの右手に巻かれた包帯を見る

カナメ「トワちゃん、だっけ？、その手どうした？」

トワ「え？、あ、これは転んだ時手首を捻ってしまつて」

カナメ「成る程捻挫か、ベルさん治せる？」

するとベルが飛び出した

ベル「ふん、この程度造作を無いわ、小娘動くなよ」

ベルはトワに近づきてをかざす

トワ「い、痛くない、痛くないです!!」

カナメ「サンキューベルさん」

ベル「ふん」

トワ「すごいです!!、ありがとうございます!!」

ベルはトワを見ると少し落ち込んだように言う

ベル「何がすごいもんか、この力では主の怪我を治すことは出来なかった」

カナメ「あの左手か？」

ベル「ああ」

サンセットレーベンズ サイド

レイン「ベルさんが言ってるのはその手の事ですか？」

匂「ああ、多分な」

匂は視線をモニターから落とし自身の手袋をした左手を見る

スズネ「何かあったんですか？」

すると旬は冗談のように軽く笑い言う

旬「世界を救ったんだ」

それは冗談のようでありながら真実だと分かる者には分かる言葉だった

シユカ「あはははははは w w w w、せ、世界を救うって w w、あはははははははは w w
w w」

そう、分かる者には……………

カナメ サイド

ベルの姿にカナメは振る話題を間違えたと思った、あわててオージがフォローを入れ

る

オージ「そ、それにしてもモクレンさん遅いつすね!!」

カナメ「そうだな、そろそろ来る頃だろ」

心の中でオージに感謝しつつモクレンの到着を待つすると襖が開き奥から人が現れたがモクレンではなかった

??? 「あく!!、ほんまや!!、ほんまにストウカナメがおる!!、あん時の蟻もや!!」

西郷組

??? 「あゝ!!、ほんまや、ほんまにストウカナメがおる!!、あの時の蟻もや!!」

現れたのは3人の男女女が1人に男が2人だ

カナメ「お前ら、西郷組の」

??? 「あゝ!!、しかももうトワちゃんと仲良うしとる!!、私かてまだ警戒されとるのに!!、ん?トワちゃん手の怪我治ったんか?えらい早いな」

カナメ「ベルさんが治してくれたんだよ」

??? 「その蟻そんなことも出来るんか!?!」

すると一緒に入ってきたリーゼントの男がカナメに声をかける

「??? 「よお、まさかこんなところで再会するとは思わなかったでえ、スドウカナメはん？」

カナメ「そりゃこつちの台詞だ、サイゴウタケシはん？、アリサはん？」

すると初対面のオージはカナメに聞く

オージ「カナメさん、この人達誰？」

カナメ「まあ軽く挨拶しただけだが、関西の有力クラン西郷組のリーダー兄妹だ」

タケシ「で？そつちのボンは何者や？、カナメはんのクランメンバーか？」

オージ「あ、ぼ、僕は仲間と言うか」

カナメ「ああ、こいつはオージ、こう見えて腕の立つレーベンズのメンバーだからな、

ちよつかい出さない方が良いぜ？」

オージ「え？」

ぽかんとするオージをよそに話は進んでいく

タケシ「おおこわ、ま、こんな状況や、ここは仲良くしようや」

カナメ「で？、そっちの人は？、紹介してくれよ、お前らのクランメンバーか？」

それは西郷兄妹と一緒に現れたもう一人の男タケシはその人を紹介する

タケシ「ああ、こいつはオボロ、クランメンバーじゃないがこの村で一緒になつてな」

オボロ「オボロです、よろしゅうじやなかったよろしくお願いします」

オボロが握手のため手を出しカナメがその手を取ろうとした時ベルが割つてはいる

ベル「……………」

オボロ「な、何か？」

カナメ「ベルさん？」

ベル「お前は信用ならん」

オボロ「へ？」

ベル「キエエエエエエエエエエ!!」

すると突然ベルが咆哮を上げオボロを攻撃し神殿の壁を突き破り外へ吹き飛ばす

カナメ「ちよつ、ベルさん!!」

西郷兄妹「はあ!？」

慌ててベルを止めるカナメとオボロが心配で外に出た西郷兄妹、そこで見たのはあれだけの攻撃を食らい平然としているオボロだった

オボロ「いや〜まさかこんなに早くバレるなんて、君の事甘く見てたよ」

ベル「ふん、白々しい最初から隠す気など無かったくせに」

オボロ「まあ良いや、どうやら僕はお邪魔みたいだからそろそろ退散するね」

そう言うとおボロの周りに青い枠が現れ消える

カナメ「ベルさん今のは」

ベル「ふん、どうせゲームマスターとやらの手先だろう」

西郷兄妹「はあ!?!、ゲームマスター!?!」

するとそこにちょうどモクレンが現れる

モクレン「あ、あの、お食事の用意が出来ましたので呼びに来たのですが、何かありましたか?」

カナメ「ああ、まあ、とりあえず飯食いながらで良いか?」

説明後

モクレン「成る程、そう言うことでしたか」

カナメ「ああ、まあな」

どんよりした空気を変えるためオージがカナメに話を振る

オージ「そ、そういうえばカナメさんは西郷組とどうやってであったの？」

カナメ「あ、ああ、それはな」

時はエイス殲滅後すぐまで遡る

タケシ「要するにカナメはんと旬はんは僕ら西郷組と同盟を結びたいいうんやな？」

カナメ「相互不可侵を軸にした協力関係を結びたい俺らは関西圏に不案内なもんでね」

タケシ「それはあんたらの次の進行先は関西圏や言うとするように聞こえるで？、な、アリサ」

アリサ「随分馬鹿にした話や思うわ、兄ちゃんこの関東もんらはあたら舐めすぎとるよ」

タケシ「ちゅうわけや、あんたらが関東でブイブイ言わせとるのは聞いとるけども、そいつがこつちでも通用すると思つたら、甘いんちやうかなあ!!」

つぎの瞬間黒服を着た男達が武器を突きつけてきたがカナメの姿はなく匂が座っている隣からベルが現れ武器を向けていた人間の手首を全て切り飛ばしていた

タケシ（な、何が起きた!!?）

その瞬間タケシの首もとには短剣を突きつけるカナメがいた

カナメ「まだ続けるか?」

何も出来なかったアリスが我に返り持っていた刀を抜く

アリス「くそが!!、兄ちゃんを離さんかい!!」

しかしその後ろにベルが現れ、結局動くことは出来ない

旬「動けば君の首も同時に飛ぶことになる」

その旬の言葉はひどく冷静で酷く冷淡だった

タケシ「そ、それは堪忍や、妹に手を出すのは堪忍や!!」

カナメ「でも仕掛けたのはそっちだろ?、俺達と殺ろうってんなら別に構わないぜ?」

タケシ「わ、分かった!、分かった!!、お前らもチャカとヤツパしまえ!!」

全員が武器を下ろし話し合いがさいかいされたが

タケシ「それで!!、お二人の要求は何や、金か?それとも配下になれっちゅーんか?」

カナメ「……俺は対等な同盟を結びたいって言ったはずだが」

タケシ「こつちからチャカ抜いたんや、落とし前くらい覚悟しとる」

カナメ「俺達は気にしてないんだけどな」

タケシ「俺の気がすまん」

カナメ「俺達の目的はゲームのクリアだ、お前達とバチバチやるつもりはない」

タケシ「今までそう言うと思ったやつはおつた、けどなこのゲームはクリアがあるのか
どうかも分からん」

カナメ「クリアはある、ゲームマスターに直接聞いた」

タケシ「なんやて!？」

カナメ「クリアの当たりもすでにつけてる、俺達は本気だぜ」

現在 神殿内

カナメ 「て言う感じだな」

オージ 「へ、へえ」

イベントクリアの条件

カナメが西郷組との出会いを話し終えた後カナメ達とモクレンは今後について話し合っていた

タケシ「それで、どうやったら今回のイベントは終わるんや？、まさか時間一杯までとは言わんよな？」

カナメ「イベントクリアの条件は恐らく50000点の獲物だ」

オージ「それってこのボスって奴？」

カナメ「ああ、多分な俺はこいつはドウメの親玉だと思ってる」

アリサ「それはそうやろうけど、問題はどこにおるかやろ？」

モクレン「分かります」

するとその場にいるプレイヤー達はモクレンに注目した

カナメ「それも見えたのか？」

モクレン「ええ、かなり前ですが、ドウメの頭目は此村を東に行つたあの大山に住み着いています、何度か戦士達を向かわせ討伐しようとしたのですが誰も帰って来ませんでした」

それを聞きカナメはしばらく考え込んだ

カナメ「ベルさん、また頼ることになるけど、お願いして良いか？」

ベルが現れ笑つた、様にカナメ達には見えた

ベル「ふん、容易いこと、あの様な雑兵しか使えん無能などさつさと倒して早く主の

元に戻るぞ、いい加減ここも飽きた」

全員がその言葉を聞き頼もしく思いすぐに出発しようとした

モクレン「お待ちください、そろそろ日も暮れます、今日はお泊まりになってまた明日になさった方が」

モクレンのその言葉を聞き外を見ると日が傾きかけ空は赤く燃えるようになっていた

カナメ「そうだな、そろそろ休んで明日に備えよう」

サンセットレーベンズ サイド

カナメが眠ったのを確認し、サンセットレーベンズのメンバーも一度戻ることにした

シユカ「じゃあ、また明日よろしくね？」

テミス「え、ええそうね、今のところ彼が一番優勝に近いみたいね、不本意だけど」

シユカ「何か言った？」

テミス「いいえ何も、じゃあまた明日のご来店お待ちしております」

サンセットレーベンズが帰るのを見届けたテミスは近くの男にすぐに幹部会議の準備をするよう命令する、自分の影が少し揺れたことも気づかずに

レイン「どうですか？、彼女の様子は」

旬「作戦会議するみたいだ」

リユージ「まあ当然だわな、あんなだけの戦力見せ付けられた上そいつらが負けることに賭けちまったんだから」

スズネ「ぶつちやけ、彼女が賭けに乗った時点でトリニティを貰った様な物でしたよね」

スイ「でもシユカさん、断られた時はどうするつもりだったんですか？」

シユカ「え？、そんなの考えて無かったわよ？」

リユージ「はあ!？」

リユージが驚きレインは呆れる

レイン「はあ、まさか、彼女が賭けに乗って来なかったらトリニティ処か何も手に入らなかった可能性がある」と

シユカ「うくんまあそうかな」

レイン「はあ、私、このクラン抜けて良いですか？」

シユカ「大丈夫よ、彼女は私の事嫌ってる上プライドが高い、小娘の提案も受けられないなんて自分のプライドが許さない」

レイン「成る程一応乗ってくるって思った理由があつたんですね、それならまあ良いです」

シユカ「ふふ、明日が楽しみだなあ、早くカナメの勇姿がみたいにや〜」

50000点の獲物

夜が明けと共に目覚めたカナメ達はモクレンに準備して貰った朝食を食べ50000点の獲物、ドウメのボスを倒すため動き出した

カナメ「どうだオージ、近くに何かいるか？」

オージ「うーん、いや、駄目だね、生物らしきものはいないね」

オージは目を閉じたまま首を振る、これはオージのシギル企鵝眼（サードアイ）を使う条件だからだ、効果はゲームの三人称視点の様なもので探索に役立っている、本人は範囲効果が狭いとぼやいていたがカナメの指導により成長し使いこなしつつある

タケシ「ほく、便利なもんやな、流石はサンセットレーベンズの若手やな」

カナメ「若手って、俺だって一応まだ高校生何だけどな」

オージ「あ!!」

するとオージが何か見つけたのか大声を上げた

カナメ「どうした？」

オージ「う、うん、今人影が見えた気がしたから追いかけたんだけどさっきのオボロつて男が」

カナメ「なに？、そいつが何してるか分かるか？」

オージ「うくん、何か洞窟っぽい所に入ってたのは見えたんだけどその先はちよつと見えないな」

カナメ「分かった、とりあえず予定通りボスの方の探索を続けてくれ」

オージ「う、うん、ん？」

カナメ「今度はどうした？」

オージ「い、いや、何か足跡が、なんだこれ？、カエルか？、にしても大きすぎるな、トカゲ？ 見たいな、多分100メートルも無いよ」

それを聞いたカナメは青ざめ叫ぶ

カナメ「オージ!!、今すぐシギルを切れ!!」

するとすぐ後ろで大きな音と共につき煙をたて何か落ちてきた、それと同時にベルとキバがベルが飛び出しいつもの咆哮を上げキバはカナメ達の前に立ち障壁を張る

ベル「キエエエエエエエエエエ!!」

キバ「皆さん、お下がりを」

カナメ「ああ、助かった」

オージ「も、もしかして」

タケシ「どうやらお出ましましたいやな」

アリサ「いやいやいやいやいや、これはヤバい、これはヤバいで兄ちゃん!!」

そこにいたのは身体と顔がドウメのものでありながらその他の四肢が虎や熊等の頂点捕食者の物で出来ている生物だった、その大きさは普通のドウメの3倍く4倍はあった

ベル「ふむ、精鋭ナイト級はあるかと思つたが精々ナイト級か」

ベルが独り言を言つてる横でカナメが質問する

カナメ「??、何の事だ？」

答えたのはベルに変わりキバだった

キバ「我々影の兵士には階級があり、下から一般、精鋭、ナイト、精鋭ナイト、将軍、元帥となります、これはそのまま強さに直結し将軍級からは会話も許されず、因みに私は将軍級でベル様は元帥級です」

カナメ「へ、へえ」

今まで何となく強さに違いがあると、思つてはいたカナメは初めて明確にランク付けされていると知り空返事することしか出来なかった

オボロ サイド

オボロ「いや、まさかバレるとは思いませんでした、自分でも上手く隠してたつもりだったんですが、しかも白々しいとかバレバレとか言われちゃいました」

オボロはスマホで電話しながら洞窟を歩いていて、電話の相手はもちろん

ゲームマスター「そうか、彼の力はそれほどまでか、こうなるともうこちらから何か出来る状況じゃないな、ご苦労、それでは早くボスを倒してこつちに戻ってきてゆっくり休んでくれ」

オボロ「はくい、え？」

ゲームマスター「どうした？」

オボロ「えっと、ボスがいますのってこの洞窟何ですよね？」

ゲームマスター「そのはずだが、どうした」

オボロ「いないんですけど」

ゲームマスター「なに？」

オボロ「だから、ボスの姿が影も形もありません」

カナメ サイド

勝負は一瞬で終わった、先に仕掛けたのはベル、その超スピードでドウメのボスに近づくと首を狙い爪を突きだした、しかしドウメのボスも驚きはしたものの反応し身体を後ろに反らしたことで掠める程度ですんだ、しかしベルのこれは連続攻撃、木をしならせながら飛び今度は背後から首を狙う、今度は反応できずドウメのボスは胴体と首が分かれてしまった

キバ「ベル様にしては時間がかかりましたね」

ベル「ふむ、ナイト級の中でも中位くらいにはなったかもな」

その姿にカナメ達は圧倒され続いてカナメのスマホに勝利を知らせる通知が届く

オージ「良かった!!終わった!!、終わったんすよね!？」

カナメ「ああ、何か色々大変だったけどな、っても俺何も出来なかってけど」

オージ「なにいつてるんすか!!、カナメさんのリーダーシップのお陰で俺生きてるんすから!!」

オージの熱弁に若干引きながらカナメは青い粹に囲まれ現代に戻った

影達の密会

カナメ サイド

カナメ「つと、ここは」

オージ「あで!!」

カナメが飛ばされた場所がどこなのか確認するために辺りを見渡す

シユカ「カナメ!!」

カナメ「シユカ？」

シユカがカナメに飛び込み力一杯抱き付く

リユージ「よお大将、今回もなかなかスリリングなイベントだったみてえだな」

レイン「前回よりマシでしょう」

スイ「そうですね」

スズネ「私は前回の事は知らないけど今回がすごいことは分かったわ」

オージ「こ、この人達がサンセットレーベンズのクランメンバー!!」

オージは突如現れたサンセットレーベンズのメンバーに驚きと歓喜の声をあげる、そしてそれを見るサンセットレーベンズのメンバー

シユカ「あなたがカナメがあつちで見つけたうちの新メンバーね」

オージ「へ？」

オージはシユカが何を言ったのか理解するのに時間がかかりぽかんとしていた

シユカ「どうしたの？、カナメが言ってたじゃない、うちの新メンバーだって」

シユカの発言にオージは慌ててカナメに確認する

オージ「カナメさん!!、あれって本気だったんですか!?!」

カナメ「何言ってる、俺は本気に決まってるんだろ」

笑いながら言うカナメの言葉にオージは涙を流しながら喜んだ

カナメ「そう言えば匂さんは？」

シユカ「カナメがクリアしたとたんどっか行っちゃった」

カナメ「なに？」

カナメ達がボスを倒しプレイヤーがいなくなった島、そこに住むモクレン達の居住地の一角に生き残った村人全員が集められていた

??? 「みんな、随分ぶりになるね、皆の顔がみれて嬉しいよ」

村人全員 「あ、アラバキ様!!」

すると村人全員がひれ伏す、アラバキと呼ばれた人間は杖をついた初老の男で優しそうな男だ

アラバキ 「さて、今回は皆に話があつて来た」

ザワザワとする村人にアラバキが説明する

アラバキ 「皆も気付いていると思うが我々は今選択を強いられている」

村長「選択ですか？」

アラバキ「そうだ、君たちの未来を選ぶ時だ、スドウカナメ、彼の世界に行くか、それとも私が導いてしまった滅び行く世界に留まるか」

モクレン「私は、まだカナメさん達にお礼出来ていません、私、行きたいです!!、カナメさん達の世界に!!」

リク「俺もです!!、俺は、友に受けた恩を返したい!!」

村長「我々も皆同じ思いです、アラバキ様」

アラバキ「分かった、その願い聞き届けよう」

するとモクレン達の周りにカナメ達と同じ青い枠が現れ消えていく、そして全員消えた時その男は現れた

匂「最後は1人寂しくなんて悲しいな」

アラバキ「君は、そうか、君がことなる世界からの落ち人か」

匂「カナメ君達の世界のゲームマスターに聞いたのか？」

???「いや、僕は何も言って無いよ」

すると匂とアラバキの話に割って入る男が1人

匂「……………」

匂が静かにその男に視線を送り一言だけ確認する

匂「あんたがゲームマスターか？」

すると男は静かに言う

???「ご名答、わたしが君の落ちた世界線でダーウィンスゲームを運営してる責任者、つまりゲームマスターだ」

するとアラバキが匂に告げる

アラバキ「そうだ、世界の落ち人、君に、いや、君達に私の世界の子供達を頼みたい、君の力で守ってやって欲しい」

匂「できる限りの事はしよう、でも俺の目的はあくまでも元の世界に、家族の元に帰る事だ」

アラバキ「承知している、世界の落ち人よ、最後に名前を聞いても良いかね？」

匂「……………水篠匂」

アラバキ「水篠匂、覚えておこう」

ゲームマスター「さて、それでは先輩、そろそろお別れだ、最後に何か言うことは？」

アラバキ「君の、目的が達成されることと君が私にならないよう祈っているよ」

ゲームマスター「私は貴方にならないよ」

すると島全体に青い枠が現れる

アラバキ「そろそろ時間だ、二人ともここを離れなさい」

旬はゲートを開きその奥に姿を消す、その前にゲームマスターに一言だけ言い残して

旬「ゲームマスター、俺に顔を見られたんだ、もう逃げ場はないと思え」

旬が消えた後ゲームマスターは身震いしいつしか消えていた

アラバキ「ふ、敗者に二人も来訪者が現れてくれた、なかなか上出来じゃないか、死の王と未来ある私、それに種も残せた、そう、私にしては上出来じゃないか」

すると島の周りに青い枠が現れ元の世界に戻った

異界難民

旬はゲートをくぐり抜けカナメ達の前に現れる

旬「やあカナメ君、イベントクリアおめでとう、それと、はじめまして、オージ君、俺は水篠旬」

オージ「は、はい!!、俺はオージです、よろしくお願いします!!」

オージ（この人がサンセットレーベンス最強のプレイヤー、俺でも分かる、この人は強い、でもなんだろう、凄く存在感が薄い、と言うか、なんとと言うか、あの蟻程の強烈な威圧感がない、と言うか威圧感がない様な？）

オージは旬の放つ存在感に不思議な感覚を覚えていた

カナメ「ああお帰り旬さん、クリアって言ってもほとんどベルさんがやってくれたん

だけどな」

旬「でも君が戦っていたのも事実だそれとさつきゲームマスターに会ってきた」

一同「はあ!?!」

旬の爆弾発言に全員が声をあげる

レイン「はあ、貴方って人はどこか行く度何か問題を起こさないと帰ってこれないんですか?」

リユージ「おいおい、クリアより先にゲームマスターに会うって」

カナメ「それで?、野郎は何か言ってたか?」

旬「いや、例の島で会ったんだが転移前であまり時間がなくてね」

するとカナメと匂の前に突如スマホが現れる、当然あの男だろうと匂とカナメは思っている。スマホに着信が入る。

カナメ「もしもし」

ゲームマスター「やあストウカナメ君、今回もイベントクリアおめでとう、2回連続でのクリアは初めてだよ」

カナメ「だろうな、こんなイカれたイベント、2回も生きて帰ってこれるなんて俺も奇跡だと思うよ」

ゲームマスター「まあそんな話しはおいといて前回君に言い忘れた事と特権の話をして来たんだ」

カナメ「言い忘れた事？」

ゲームマスター「うん、君のシギルについて、前回言おうと思ってただけど、どこ

かの乱入者さんのせいですっかり忘れてたよ、じゃあ良いかい？、火神槌（ヒノカグツチ）久しぶりに出会えた新種、君の力の名前だ」

カナメ「火神槌（ヒノカグツチ）」

シユカ「確かそんな名前前の神様がいたよね？」

レイン「イザナミとイザナギと言う神様の子供ですね、その火が原因でイザナミを殺してしまいます」

スイ「ひえ、とんでもないですね」

レイン「ですがその力から鍛冶や焼き物の神としても崇拜されています」

ゲームマスター「流石、世界関数（ラプラス）の瞳を持つ君には当然か」

レイン「これくらい常識の範囲です」

ゲームマスター「まあ兎に角伝え忘れたことは確かに伝えたよ、それじゃあ特権だけで今回はどんな特権を求める？」

カナメ「特権って2つも貰って良いのか？」

ゲームマスター「うん、良いよ、ただ流石にそんなに強いのは上げられないよ？1人にそんな強い力が集まるのは僕としても好ましくない」

カナメ「そうかい、でもな、毎回言うが急すぎるちよつと待て」

ゲームマスター「うん、良いよ」

10分後

カナメ「……………って言うのはどうだ」

ゲームマスター「君は本当に面白いね!!、良いよ今回はそれで行こう!!、そうそう君、例の彼らは君達のクラン拠点に転送しておいたから速く迎えに行った方が良いよ？」

旬「そうか、分かった」

するとスマホが消える

シユカ「彼らって誰よ？」

旬「モクレン達だ」

カナメ「は？」

旬「モクレン達の世界のゲームマスターが俺に彼らを助けるように求めてきた」

レイン「それを引き受けたと」

旬が頷く

カナメ「ちよつと待て、じゃあ今モクレン達は未来レベルの文明の説明も無しにいきなり知らん場所に飛ばされたって事か？」

旬「一応防犯用の兵士達がいるから部屋から出さないよう命令しておいた」

カナメ「一応聞くけどその兵士達話せる？」

旬「いや、そこまで高レベルじゃない」

カナメ「お前ら!!、急いで戻るぞ!!」

モクレン サイド

モクレン「ここは？」

リク「分からん、見たこと無い造りだが家の中の様だな」

住み慣れた地を離れ異界に渡ることを決めたモクレン達、飛ばされた謎の建物の中を皆でキョロキョロしていると突如影の中から人形が現れる

リク「何奴!!」

リクは持っていた槍を構え兵士達に突きつける、兵士達は手を振り戦う意思は無いことを伝える

リク「何だ!!、何を言っているのか分からんぞ!!」

兵士の1人が窓を指差す、リク達はそちらを見ると別の兵士が手招きしていた、モクレンは一瞬迷うも他に選択肢も無いため窓に近づくとリクは慌てて止めようとする

リク「お、おい!!、モクレン!!」

モクレン 「大丈夫です、兄様」

モクレンが窓に近づくと兵士が窓の外を指差す、そこには見慣れぬ馬無し馬車や天を突く建物らしき物が立っていた

モクレンが再び兵士を見るとバツのマークを作っていた

モクレン 「危ないから外に出るな、と言うことですか？」

モクレンが何と無くそんな事を聞くと兵士が頷くそれを見てモクレンは確信する

モクレン 「兄様、彼らは敵ではありません」

リク 「何？」

モクレン 「外は危ないからここにいろ、そう言ってるのです」

モクレンの言葉に兵士達が頷き壁の絵を指差すそこには笑顔のシユカ、スイ、リユージ、レイン、旬、そしてカナメの姿があつた

モクレン「カナメ様、と言うことはここはカナメ様の屋敷なのですか？」

モクレンが兵士に確認すると兵士達が頷いたそれを見たリクも漸く警戒心を解いた、モクレンはその場にいる村人全員を安心させるため村人達に説明した、本来ただのビルの一室に村一つ分の人間等入りきる筈がない、しかしここは旬の力で空間を広げており現代の城なみに広さがあつた

数十分後

カナメ「リク!!、モクレン!!」

リク「カナメ!!」

モクレン「カナメ様!!」

カナメ達が到着しリクとモクレンが立ち上がった

カナメ「皆悪いな急にこんなことになっちまって」

モクレン「いえ、あらかたの事はアラバキ様に聞いてますので」

カナメ「アラバキ様？」

匂が現れカナメに説明する

匂「彼らの世界のゲームマスターだ」

カナメ「なるほど、とりあえず問題はこれからこいつらをどうするかだな、問題は山積みだ、戸籍、人数把握、住む場所、こりやもう難民だな」

旬「そう言うな破滅する世界から来たんだ」

カナメ「そうだな、とりあえず暫くはここに止まってくれ、その間に対策を考えよう」
モクレン「ありがとうございます、ご迷惑をおかけしますがよろしくお願いします」

影の秘密

カナメ「さて、何か良いアイデア無いか？」

一同「「うん」」

モクレン達が来て既に3日、未だにモクレン達の住みかを決める事が出来ずにいたリ्यूージ「1人2人ならともかく、流石にこの数はなく」

レイン「普通に考えて無理です」

旬「……………」

スイ「あ、あのおっきいビルを買うとか、建てるとかは？」

スズネ「無理よ、個人でそんな大きなビル頼む何て」

シユカ「旬の影の中で良いんじゃない？」

カナメ「いやいや、そんな訳には行かねえよ」

すると旬が提案する

旬「とりあえずビルさえあれば後は俺が何とか出来る」

一同が旬を見る

カナメ「ビル？」

旬「ビル丸々一棟あれば俺の力でここにいる全員住める大きさに広げられる、問題はビルの契約者をどうするかとどこにそんな都合の良いビルがあるかってことかな」

カナメ「最初の問題が一番大変って事か」

するとレインが提案する

レイン「あの、とりあえず不動産に言って大きな建物を見に行くのはどうです？」

カナメ「そうだな、とりあえず内装とかは匂さんがやってくれるし兎に角近くのデカイ不動産に当たってみるか」

そうして皆で手当たり次第にビルを当たってみたが

カナメ「まあそう都合の良いビルなんて無いよな」

匂「ふむ、仕方無いもうこの手しかないか」

カナメ「何だ匂さん？他にも策があるのか」

旬「うん、まあそうだね、かなり目立つから避けたかったんだけど、とりあえずこの辺で一番大きい土地を買おう」

カナメ「土地？」

旬「うん」

そうしてその日の内に渋谷ー大きな土地を買い、何日か後の夜サンセットレーベンスのメンバーはその土地の前に来ていた

カナメ「なんだってんだ旬さん、こんな時間に」

旬「出来るだけ人目に着かない方が良いと思ってね」

すると旬は土地の真ん中に立つ、すると突如土地から黒い煙の様な物が立ち上ぼり次々何かを形成していく、それはどんどん大きくなり煙が消える頃には大きく立派なビルが立っていた

カナメ「……………」

レイン「……………」

シユカ「……………」

リユージ「…………マジか？」

スイ「ふわぁ、凄い大きな建物ですね」

スズネ「いやいやいや!!、驚くところそこじゃないでしょ!?!、何で一晩どころか5分位でビルが一棟立つのよ!?!」

すると扉が開き匂が出てくる

匂「とりあえず中を確認してきたけど問題なさそうだ、今日からモクレン達はここに

住めば良い」

カナメ「いやいや、それはありがたいけど俺達はそう言うことを聞きたいんじゃないんでしょ」

するとレインが険しい顔をして匂を見る

レイン「匂さん、単刀直入に聞きます、貴方のその力、シグルじや無いですよ」

レインの言葉にサンセットレーベンズのメンバーは驚く

カナメ「はあ!？」

シユカ「うそ!？」

リユージ「マジかよ」

スイ「え？」

スズネ「え？」

全員匂を見ているなか匂は

匂「流石にバレたか」

と言つて笑つていた

レイン「当然です、貴方の力は基本は兵士の召喚ですが、これはそんなものではありません、シギルの複数持ちなんてあり得ません、ならそれ以外の力と考えるのは自然です」

匂は手を上げ降参のポーズを取り言う

匂「そうだな、カナメ君には少し話したが皆にはまだ何も言つてなかつたな、そろそ

ろ良い頃か、皆に話しても」

旬は覚悟を決め話す覚悟を決めた

水篠旬

カナメ「旬さんの秘密、教えてくれるのか？」

旬「そうだな、そろそろ頃合いだろうね、一先ず中に入ると良い、あそこなら話しやすい」

旬に促されサンセットレーベンズのメンバーは旬が建てたビルの中に入り用意されていた椅子に全員座る

レイン「それで、貴方は一体何者なんですか？」

最初に切り出したのはレイン、旬は少し笑い自分の事を語り始めた

旬「俺は、そうだなこの世界とは別の世界から来た人間かな」

その言葉にカナメ以外の全員が驚く

シユカ「ちよつとカナメ!!、何で驚かないのよ!?!、普通おかしいでしょ別世界の人間なんて!!」

カナメが驚かない事にシユカは更に驚く

カナメ「い、いや、実は俺は前の宝探しイベントの時に旬さんに直接聞いた」

レインはリユージュの方を見て確認する

レイン「リユージュさん、念のため聞きますが彼は」

そこまで言うところリユージュは首を振り言う

リユージュ「ああ、信じらんねえ事に全て本当の事を言つてやがる、つまり本当に異世界の人間って事だ」

レイン「そうですか」

すると今度はスイが質問する

スイ「あ、あの、それで匂さんはどうしてこつちの世界に？」

スイの質問に皆が匂を見る

匂「ああ、マヌケな話しゲートから落っこちてね、気付いた時にはこつちの世界にいた」

レインはリユージを見るが再び首を振られた

するとシユカは興味を持ったのか更に質問する

シユカ「ねえねえ、異世界ってどんな所？」

旬「俺がいた世界は君主と呼ばれる者達と支配者と呼ばれる者達が争っていた世界だ、そんな中で地球に眼をつけた君主達から人間を守るため支配者は人間に力を与えた、力を与えられた者を覚醒者と呼んだ、俺も覚醒者の1人だった、最弱の覚醒者、つけられたあだ名は人類最弱兵器だ」

カナメは我慢できなくなり話を遮り聞く

カナメ「ちよ、ちよつと待て!!、最弱?、旬さんが!？」

旬は笑うとてを前に出しあるものを写し出すそれはかつて最弱兵器と呼ばれた旬が戦う姿だった

シユカ「何か弱そうな奴にやられてる、私でもシギル使えば勝てそうなのに」

リユージ「ああ、俺でも武器があれば勝てそうだな」

カナメ「匂さんこれは」

匂「過去の俺だ」

一同「「はあ!?!」」

レイン「言つては失礼ですが言いますね、変わりすぎじやありませんか?」

シユカ「何でこれが（過去の匂）がこれ（現在の匂）になるのよ!?!」

匂「ある奴に力を貰ったから」

カナメ「ある奴?」

匂が頷く

匂「9人の君主の中でも特に力が強い2人がいた、その内の片方、亡者達の王にして

影の君主、アスボーン」

「え？」

それを言ったのはスイ、スイの反応をおかしく思った一同がスイを見る

カナメ「どうした、スイ？」

スイ「い、いえ、あの、その」

レイン「気になることがあるなら聞いておいた方が良いでしょう」

レインの言葉にスイは旬に聞く事にした

スイ「あ、あの以前エイスに拐われて拷問された時、夢を視たんです」

カナメ「夢？」

スイ「はい、あのそれでその夢の中で自分はアスボーンだつて言う黒い鎧が話しかけてきて」

匂が反応する

匂「マントを羽織つて同じくらい黒い馬の様な奴に乗つてたか？」

スイ「は、はい!!、そうです!!、その人です!!」

匂「……………イグリット」

呼ばれたイグリットが出てきて匂が聞きたかったであろう事を言う

イグリット「はい、間違いなくアスボーン様だと思われます」

匂「どうなってる」

カナメ「そのアスボーンって奴がいたらおかしいのか？」

旬「ああ、アスボーンは俺に力を渡す時俺と一つになった、アスボーンがいる筈が無いんだよ」

その言葉にレインはボソツと言う

レイン「幽霊？」

それを聞いたスイはひいっと悲鳴を上げた

旬「いや君主と支配者は元々精神体、人間の身体を使わないとこつちの世界にこれない筈だ、それはアスボーンも同じな筈」

レイン「あの、とりあえず話がそれ始めたので続きを」

旬「ああ、そうだな、えっとどこまで話したっけ？」

レイン「アスボーンって人に力を貰ったと言うところですよ」

旬「ああ、そうだった、それで力を貰って地球に攻めてきた君主達と戦った」

そこでレインが疑問に思う

レイン「アスボーンさんは君主側だったのに貴方は君主と戦ったのですか？」

旬「ああ、そもそもアスボーンは支配者だったんだが支配者が絶対者と言う自らの親の様な奴を殺した事で君主側に寝返ったんだ」

レイン「なるほど」

旬「それで地球に攻めてきた君主を倒した後、失った全てを取り戻す為に支配者達に頼んで時間を巻き戻して貰って今度はこっちから君主達のいる場所に攻めこんで30

年程戦ってここにいて、大分省いたけどこんなところかな」

サンセットレーベンズの面々は啞然としていた

カナメ「成る程、つまりあんたは俺達より強いのは当然ってこった、何せ30年戦ってんだからな」

旬「まあね」

カナメ「まあ、それを知ったからどうこう出来るって訳でもないしな、これからもよろしく頼むぜ旬さん!!」

カナメは立ち上がり旬に手を差し出し旬も立ち上がりその手を取り笑いながら言う

旬「ああ、これからもよろしく」

それをサンセットレーベンズのメンバーも笑顔で見ていた

精算と不穏な事件

旬が秘密を明かし数日後、カナメ達はトリニテイに向かっていた

カナメ「しかし、まさかトリニテイと賭けをしてたなんてな、何で止めなかったんだよレイン」

レイン「私に言わないで下さい、元々貴方がいない時のサンセットレーベンズの指揮をシユカさんに渡していたのは貴方自身じゃないですか」

カナメ「今回は良かったけどやっぱレインか旬さんにしとくべきだったかな」

レイン「念のため言っておきますが旬さんも自分の影の兵士を賭け金にしました」

カナメ「はあ!？」

レイン「賭けに負けたら1年ベルさんを貸すと」

すると匂の影の中からベルが飛び出す

ベル「キエエ!!、王よ!!、それは誠ですか!？」

匂に掴みかからん勢いで言うベルに匂は笑って言う

匂「お前が負ける筈無いだろう」

するとベルは一瞬止まりプルプル震えだした、カナメ達は流石にベルが怒ったのかと思っただがベルの顔を見ると何故か泣いていた

ベル「お、王よ、その様に期待して頂いて拙者感無量でございます」

ベルが泣いているのを見たカナメ達は匂に聞こえないようこそそこそと会話する

カナメ「やっぱ旬さんってたらしだよな」

レイン「いや、あれはベルさんがちよろいだけでは？」

シユカ「両方よ、きつと」

リユージ「まあ、良いじゃねえか仲良くてよ」

スイ「はい、良いことですよ」

何だかんだしているといつの間にかトリニティの前についていた

黒服「お待ちしております、サンセットレーベンスの皆様、トリニティ責任者テミス様がお待ちです」

黒服が言うときユカがムツとしたように言う

シユカ「ちよつと、トリニテイの責任者はもう私達なのよ、そこ、間違えないでよね」

黒服は勢いよく頭を下げる

黒服「はい、失礼いたしました!!」

その後、カナメ達はテミスがいる部屋に案内されテミスとカナメが握手する

カナメ「よお、テミスさん、初めましてだな、俺はストウカナメ、一応サンセットレーベンズのリーダーだ、よろしく」

テミス「存じておりますカナメ様、ご挨拶が遅れて申し訳ございません、私、トリニテイ元責任者のテミスと申します」

カナメ「じゃあ早速で悪いけど賭けたものを貰って良いか？」

テミス「はい、致し方ありません、負けは負けですもの」

Sを押し
テミスからトリニテイの支配権の譲渡申請がカナメのスマホに送られカナメがy e

カナメ「じゃあ今日はとりあえずこれだけだ、俺達はまだ寄るところがあるから、じゃあな」

こうしてカナメ達はトリニテイを後にした

カナメ達が帰った後のトリニテイ

テミス「帰ったわね」

黒服「ええ」

テミス「グスツ」

黒服「ええ」

テミス「うわあああああん!!、私のトリニティがああああ!!」

テミスは泣いていた

黒服「まあ、無くなった訳では無いですから」

黒服が慰める

テミス「うわあああああん」

黒服曰く、テミスは1日泣いていたと言う

その後、カナメの高校前

カナメ「じゃあ手続きしてくるから、皆待ってて」

シユカ「え、私もついていく」

カナメ「いや、ついて行くって、君部外者でしょ？、学校は部外者立ち入り禁止なの分かる？」

シユカ「だって」

旬「!?」

その時旬が何かに反応し学校の中に入っていく

カナメ「え？、ちよつと旬さん!?」

シユカ「わ、わ、わい!!、お邪魔します」

カナメ「ちよ!!、おいシユカ!!、くそッ!!、こうなったらシユカは妹で旬さんは兄貴っ

て事にするか」

レイン「いや、シユカさんはともかく旬さんは無理がありそうですけど」

リユージ「仕方ねえだろ、あの人の行動にやいつも理由があつた今回もそうだろ」

レイン「前から思つてましたけど、リユージさんつていつも旬さんの方を持ちますよね」

リユージ「まあ、何となくな」

カナメ サイド

カナメ「くそ!!、2人ともどこ行つたんだよ!!、しかもなんか学校荒れてるし、つていた!!、おいシユカ!!」

シユカ「あ!!、カナメ!!」

カナメ「おい、勝手にうろろすんな!!」

シユカ「は〜い」

カナメ「後は匂さんだな、その前に手続き済ませるか」

職員室にて

先生「良かったわ〜、真面目なストウ君が急に行方不明になって本当に心配で」

カナメ「すいません、ちよつと個人的な事情で」

先生「まあ、変な事件に巻き込まれたとかじゃなくて本当に良かったわ」

カナメ「はあ、まあ一応」

先生「それで、明日から普通に登校出来るのよね？、補習を受けることになるけど出席日数は何とかなるわよ？」

カナメ「ああ、すみません実は登校は、!？」

その時突然外で爆発音が響いた

先生「また、あの子達は!!」

カナメ「は？」

先生が外に飛び出した後を追いかけるカナメ

先生「貴方達!!今度は何をし…て、え？」

カナメ「おいおい」

そこにいたのは無数の倒れる生徒の真ん中に佇む旬の姿だった

完成種

カナメ「おいおい、何やってんだよ」

旬が佇む姿を見るカナメ、それに気付いた旬はカナメに近付いた

旬「手続き終わった？」

カナメ「あ、ああ」

旬「じゃあ行こうか」

カナメ「ああ、じゃあ先生またな」

カナメと旬が立ち去ろうとすると当然先生が声をかけてくる

先生「ちよ!!、ちよつとスドウ君!、そのまま帰れる訳無いでしょ!!」

カナメ「や、やつぱり?」

先生「当然でしょ!!、その人誰よ!!、しかもこんな状況にして!!」

カナメが返答に困っているとシユカが追い付いてくる

シユカ「あ、いたく、もう勝手に居なくならないでよ、私道分らないんだから」

カナメ「お、おう、シユカ悪いな」

先生「増えた!!」

カナメ「ああ、紹介してなかったな先生、こっちの女の子はシユカ、俺の妹でこっちが俺の兄貴の匂だ」

先生の顔を見るとポカンとしていた

カナメ「先生？」

先生「はっ!!、そ、そうスドウ君兄弟いたのね、で、でも!!お兄さんがうちの生徒を怪我させたのは看過できないわよ!!」

カナメがうつ、とすると匂が前に立ち話し始める

匂「すみませんでした、弟についてきたらはぐれてしまいうろろしていると絡まれてしまいました、仕方なく撃退させて頂きました」

匂が頭を下げる

先生「あ、そ、そうだったんですか!?!、すいません、何も知らずに」

匂「いえ、生徒の親族とはいえ学校の生徒を怪我させたのは事実です」

カナメ「はは、先生、兄貴が良いって言ってんだ、それより先生、何で学校こんなに荒れてんの？」

すると先生はビクツとなりポツポツと話し始める

ある日生徒の1人が言うことを聞かなくなり暴れ始めた事

その生徒を注意した教師が尽く辞めていった事

その生徒と一緒にいた生徒まで暴れ始めた事

その生徒達が超能力を使うようになった事

カナメ「超能力？」

旬「行け」

旬がボソボソと言うと影が無数に分かれ素早くチリジリになった

先生「え？」

旬「いえ、それでその生徒の一部が俺に襲い掛かってきたって訳か」

カナメ「はは、まあ、襲う相手が悪かったみたいだけどな」

すると旬の影に1つの影が取り込まれた

旬「……成る程、先生、俺ならこの問題を解決出来るかもしれませんが」

先生「本当ですか!?!、本当は部外者にこんなこと頼むのは駄目なんですよけど、是非お願いします!!」

旬「ええ、お任せ下さい」

先生が離れ3人だけになる

カナメ「それで、何であんなことになってんだ？」

旬「たまたま兵士を潜りこませてたら見えたからね、急いで調べた、ほぼ間違いなくDゲームプレイヤーだ」

カナメ「!？」

シユカ「そんなの放っておけば良いのに」

旬は歩きだしやがて1つの扉の前で止まる

カナメ「ここ？」

旬「うん、間違いない」

旬はスマホを取り出しバトルを仕掛ける、すると中からバトルを告げる音楽が流れる

生徒1「あ？何これ？なんの音？」

生徒2「知らねえよ、うっせーから早くどうにかしろ」

旬「行くぞ」

扉を蹴り開け中に入り生徒達を次々制圧していく旬とカナメ

旬「ふむ、親玉が居ないな、確かオオサコ君？だったかな？」

カナメ「ああ、そりゃあ、あの人だな」

オオサコ「てめえらああ!!、あべし!!」

オオサコは匂に押さえ込まれ身動き一つ取れない

オオサコ「くそ!!食らえ!!、な!？」

オオサコが身体から電を放つが匂には効かないと言うより匂にダメージを与える程の威力が無かった

カナメ「ああ、無駄無駄、その人もう半分人間辞めてるから、お前ら自分達を人間の進化種か何かだと思ってるみたいだが、その人は人間の完成種何だよ」

その後オオサコに（無理矢理）話を聞いた、何でもオオサコにゲームを教えた人間がいたようだが最近その人に会えずゲームの情報欄からその人の名前が消えたらしい

匂「間違いなく死んでるな」

オオサコ「え？」

カナメ「知らなかったのか？、このゲームは人の命を賭けたデスゲーム何だぞ？」

シユカ「まあ、体の良い駒にされちやったのかにや〜」

カナメ「まあ、これに懲りたらもう変なことすんなよ、じゃあな」

カナメ達はオオサコ達に2度とゲームに関わらない事を約束させ次いでに先生達につきだした

カナメ「何か変な事件にあったな」

旬「まあ、もうこの学校でゲームが行われる事は無いだろう」

カナメ「そうだな、さて用事もすんだしさっさと帰るか」

舞姫降臨

???
サイド

??? 「はあ、はあ、はあ、（一体何匹いるの？）」

鎧を纏った女性が怪物の屍の山の上で息を切らしていた、その周りにはいくつもの怪物の死骸と人の死体、そしてまだ生きている怪物と人間が争っている、すると彼女の元にメガネをかけた赤髪の男性が近付いてくる

??? 「向坂ハンター、大丈夫ですか？」

彼女は息を整え答える

向坂「ええ、ありがとうございます最上代表」

2人が話している間にも怪物達は次々襲い掛かってくる

最上「くっ!!、なんて数だ!!」

向坂「くっ!!」

2人が怪物を倒す度同じ数だけ怪物達が現れる、しかし仲間が増えることはなく徐々に物量に磨り潰される、やがて2人も限界を迎え動くことが出来なくなつた

最上「くっ!!、もう持たない!!」

最上と向坂は死を覚悟した、しかし突如怪物達が消え辺りは静寂に包まれる

最上「これは!!」

向坂「ええ、水篠ハンターがやってくれたんだと思います」

そこには怪物達が消え怪物の死骸のみが残っていた、それは使えるべき主を消滅を意味していた、やがて2人が疲れから座り込み休んでいると彼方から光が迫り余りの眩しさに向坂は目をつぶってしまった

向坂「え？」

次に目を開けた時そこには死骸の山ではなく無傷のビル等の建築物が並んでいた、怪物達の襲撃により建物は全て倒壊したか崩れているはずだったしかも何事も無かったかのように一般人が普通に生活している、向坂は戸惑っているとヒソヒソと話す声が聞こえてきた

女子高生1「ねえあの人凄い綺麗じゃない？」

女子高生2「本当だ、でも何かボロボロだし変な格好してる」

女子高生1「本当、何かのコスプレ？」

女子高生2 「そうじゃない？」

自分の格好を見ると怪物達と戦った時の鎧のままだった、彼女は次第に恥ずかしくなり人通りの少ない路地で鎧を脱いだ、幸い鎧の下は普段着だった為問題なかった、しかし向坂は自身の現状を良くは思え無かった、一先ずここがどこなのかを訪ねるため適当な人に話しかける

向坂 「すみません、道に迷ってしまって、ここってどこですかね？」

通行人 「え？、ああ、ここは渋谷の○○通りです」

向坂 「そうですか、ありがとうございます」

通行人が去っていき向坂は考える

向坂 「渋谷？、ここが？」

向坂は首をかしげた、自分の知る渋谷は確かに発展してはいたがここまでではなかった、あれこれ考えているとズボンのポケットが震える、何かと向坂がポケットに入れると一台のスマホが出てくる

向坂「え？私、スマホなんて入れてなかった筈なのに」

向坂が不思議がっていると再びスマホが震えた、メッセージが入っており開いてみるとゲームの勧誘メッセージだった

向坂「何これ？、ダーウィنزゲーム？」

向坂はなんのけなしにURLをクリックし現れたゲーム画面を触ろうとした、その時後ろから不意に声をかけられた

??? 「触らない方が良いですよ」

向坂が反射的に後ろを振り返る、するとそこには見慣れた顔があり安堵する

向坂「水篠ハンター!!」

向坂は駆け寄る

旬「お久しぶりです、お元気でしたか？」

向坂「はい、ありがとうございます、それよりモンスター達のボスを倒すことは出来たんですよね!、目の前からモンスターが消えたと思っただけで急に遠くから光が迫ってきて目を開いたらここに、それにこの光景だつて、スマホを持ってなかったのにいつの間にか持つてるし、どうなってるんでしょう？」

旬「とりあえず、付いてきてください、その辺も含めてご説明します、こちらへ」

向坂「あつ／／／／」

旬は向坂の手を引き歩いていった